

# このごろ **思** うこと

## 第二の原点

館林 千賀子

平成11年卒

岐阜高校時代の思い出といえば、私には自分の身に起こったこの出来事をどうしても外せない。米国における十カ月間の交換留学を終え復学した半年後の98年1月3日、私は交通事故で、両手両足の自由を失った。

分一人が違う世界に放り出されたという感覚が、私を苦しめた。

「復学にあたり、トイレ改修、教室変更を考えています」との担任の先生からの言葉、「帰ってくるのを待てるよ」との同級生からの手紙が『戻る場所』が自分にはあると思わせ、安心させてくれた。そこへ戻りたい一心でリハビリに取り組んだ。

最終的には、留学中の単位を換算するという方法で、私は卒業資格を得ることができた。

大学進学などそれぞれのステージに進む友人を横に、再び状況を比べてしまうこと

で、自分の身に起こった出来事を恨むこともあった。そんなひねくれ者の私に、友人は「大学内で車椅子の学生を見かけたよ」と、私に希望となる情報を与えてくれた。勉強さえ頑張れば、車椅子に乗っていても行ける大学はあるんだという気持ちにさせてくれた。

留学、入院のため、同年度に生まれた友より三年遅れで大学入試を受けることになった。当時、私はもう岐阜高校の生徒ではなかった。しかし、そんな私の進路相談、論文指導を岐阜高校の先生方がしてくださった。障害を負った私が大学に進学することで、その後の人生の選択肢を広げることができるようにとのご配慮からだ。

友人、先生方の支えを受け、大学の門を叩くことができた。

一生徒の巣立ちを最後まで見守ってくださった先生方、また旅立てるように励まし続けてくれた仲間たちに、心から感謝している。体の一部の

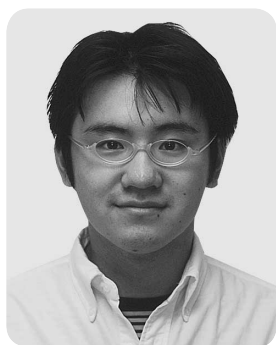
機能を失っても、その状態で生きていく一歩を踏み出させてくれてありがとう。

これまで、心身ともに支えられてばかりだが、逆の立場にも立てるようにしたい。

## 岐阜で挑戦する若者を増やしていきたい

秋元 祥治

平成10年卒



NPO法人「G-net」を設立し、活動を重ねて六年目を迎えました。生まれ育った岐阜の街の活性化を仕事にして、地域に貢献したいという思いから、早稲田大学在学中に立ち上げ、現在では六名の職員と共に事業に取り組んでいます。

大学進学当時は、首都圏で



の華やかな就職を志しましたが、帰省の度に柳ヶ瀬や街に触れ、何か地域のためにできることはないかという問題意識を持って過ごしていました。そんな中で、やはり上京した岐阜高窓の仲間たちとの意見交換で「ただ不満を言うだけじゃ始まらない。力不足でも、できることをまずは始めよう」と話し合い、取り組みを始めました。

立ち上げてから三年間、「ビーンズフェスタ」(10月・十万人規模)という柳ヶ瀬地域でのイベントを実施したり、若者に情報を提供しようとしてフリーペーパー「Beang」(季刊・一万部)を発行するなど活動してきました。が、これでは活性化につながらない…という問題意識から、産業を担う起業家的な同世代をもっと増やしたいとの思いに至りました。そこで、2004年から経済産業省との協働で、中小企業やベンチャー企業の現場で意欲ある若者が期間限定の正社員として修行する「長期実践型インターン」

事業を展開し、何人かの起業家を輩出したり、受け入れ企業の事業加速に貢献させていただきました。

今年度からは起業希望者向けのインキュベーションオフィスを開設し、もっとも地域に貢献できるよう努力を重ねていく決意です。

この五年間という、まだまだ短い創業期間を振り返っても、本当に多くの方々に支えていただきました。中でも、岐阜の中心で活躍する岐阜の先輩方があってこそ今の今だ、と思えます。

改めて岐阜時代を振り返って思い起こすのは「百折不撓」の精神。これからも、この岐阜魂を忘れることなく日々を過ごしていきます。

## 年を重ねて

大和田 順子  
(旧姓・榎瀬)  
昭和59年卒

この頃、少し前にはやった歌だと思っていると三年も前



のヒット曲だったり、中学二年生になった娘と話しながら自分が同じ年頃のと看どうだったかを考えるとそれが四半世紀も前のことだったりして、愕然とすることがあります。

時のたつのはなんと早いのでしょうか。年をとるにつれて、過去については古い記憶を昨日のことのように思い、未来についてはより先のことを考えているようになり、親や自分の老後、子供の将来、はては地球の将来を考えたりもします。人が年を重ねるといふのはこういうことなのでしょう。

多くの人に育てていただき、今日自分がいることを痛感する日々です。まだ自分も発展途上でありながら、次の世代を守り育てる責任が私に

ちにかかってくることを感じます。我が父と同じように敬愛していた岐阜高校恩師の太田先生には、在学中の進路の相談はもちろん、卒業してから就職や人生の様々な局面で相談にのっていただいていた。その太田先生が鬼籍に入られて、いくつになっても先生の前では子供でいられたのに、これからは自分の足で歩いて行かなければならないと何とも寂しく心許なく感じたとき、こうしたことを最初に意識したように思います。

現在の勤め先は、人事制度設計のコンサルティングや人材開発研修などを提供しています。そういった仕事で社会と関わったり職場の若い人たちと接するなかで、また自分が親になり子供が成長していくさまを見ながら、だんだんとこの「私たちが次の世代を育て、守ってゆく番でもある」という思いは強くなっています。きっと、そんなに大役は果たせず、難しいこともできないでしょう。せめても

手の届くことを一生懸命するのみですが、それでいいからがんばろう、それが大切なのだと思ったりします。

懐かしく甘く子供のころ、学生のころを思い出しながら、これから先は少しづつ、いただいていたものをお返ししていこう、そんなことをこのごろ思っています。

## コノゴロ

### 想フ事

榎 哲 朗  
昭和59年卒



あ朝の打合せはバス  
い胃が痛いってこうなのネ  
う運動は事務所の階段くらい  
え80'sの音楽がiPodに  
お大阪では三年漫才修行  
か会社辞めて土日なし

き岐阜で一度鵜飼を見たい  
く車ナシ生活二年。欲しいノ

け健康ネタが話題の中心  
こ高体連体操ってあったね  
さササキじゃなくてサカキ  
し四十二歳ノもうこんな年ノ  
す寿司が一番、焼肉二番  
せ積分・微分って何だっけ？  
そソ連経由でパリに行ったな  
た食べ放題より質重視

ち賃貸放浪生活がまだ続く  
つ坪庭バルコニーに蝶が産卵  
てテレビはタモリ倶楽部が好  
と東京が今のメインの住まい  
な生ビールサーバー購入ノ  
にニューヨークには二年  
ぬ抜け毛も徐々に増え始め  
ね寝たいけれど目が覚める  
の飲みは毎日、肝臓ポロポロ  
はバブル世代と呼ばれて消え

た  
ひ日々是決戦鉛筆で受験  
ふ太れない頃もあったのに  
へ屁理屈だったのが蒞蓄に  
ほ保険にも入らないとね  
まマラソンだけは嫌だった  
み見猿、言わ猿、キカサル  
む無茶飲じゃないのに二日酔  
めメールは日ジャンクだらけ  
も喪中ハガキも増え始め

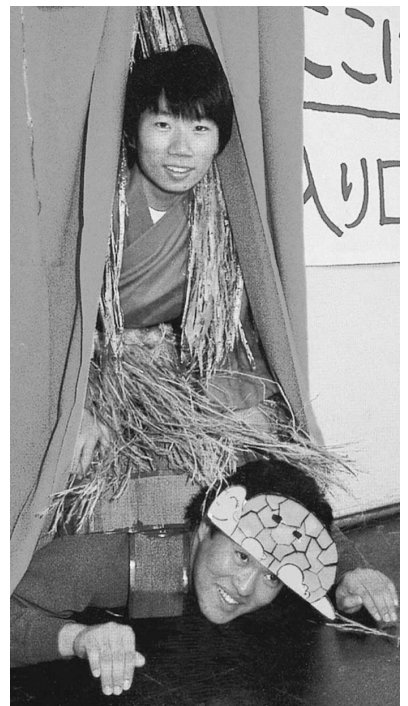
や野球の決勝戦が残念だった  
ゆ幽霊話はまだ怖い  
よ横浜で五年間浜っ子生活  
らラーメンはトンコツ、醬油  
り理系の頭が欲しかった  
る留守電に朗報ナシ  
れレイモンド・チョウが憧れ  
るロサンゼルスでは快適生活  
わ若者になってないが口癖に  
んんん。卒業して四半世紀ノ

ゴ覽ノ通り、高校卒業以来、  
全ク大シタ事モ考エテイナイ  
毎日ヲ過ゴシテイマス。皆様  
ハ如何？

## 「いじめ問題」 の問題

寺田 吉道  
昭和59年卒

教育を巡る議論がかまびす  
しい。いじめ問題など、メデ  
ィアが取り上げない日はない  
だろう。大抵の場合報道は学  
校や教育委員会に辛辣であ  
り、特にいじめによる犠牲者  
が出ると責任追及一色の論調  
となる。報道番組の司会者や  
コメンテーターはこぞって学



写真上が私

校、教師を非難し、評論家も  
教育行政批判を繰り返す。若  
い命が失われるのは尋常事  
なく、教育現場にある者が責  
任を問われても当然である。  
弁解の余地が無い。しかし、  
何故直接の加害者(いじめた  
者)をさておいて当局側のみ  
が指弾されるのだろうか。  
間違いなく一番に責めを負  
うべきは加害者本人である。  
一般的な刑事事件であればテ  
レビも新聞も当然その本人を  
追うはずだ。ところがいじめ  
の場合は違う。加害者は未成  
年者だから、という配慮があ  
るのだろう。あるいは加害者  
自信も荒廃した教育の被害者  
だという論法もあるのかもしれない。そうすると、本来は

いじめを行った者に向けられ  
るべき怒り、責任追及の衝動  
は行き場を失ってそのまま学  
校当局になだれ込む。論理的  
には加害者と教師の責任は別  
個に論ぜられるべきだが、そ  
んな理屈は聞いてもらえな  
い。万一先生方がそんな異論  
を差し挟もうものなら、それ  
こそ徹底的に糾弾されるだろ  
う。教育現場を預かる者とし  
ての責任は否定できない以  
上、一切の反論は許されな  
い。メディアではそれが当然  
とされてしまう。  
だがこれはメディアだけの  
論理だろうか。我々視聴者も  
情緒的、感覚的になってこれ  
に加担していないか。異常な  
事件が起これば自ずと責任者

捜しの衝動が高まり、そこに  
反論を禁じられた責任者が登  
場すれば、世論の非難は集中  
し、エスカレートしてゆく。  
未成年者である加害者と異  
り何の遠慮も必要なく、「教  
師が悪い」「学校が無責任」  
という短絡的な批判が安易に  
量産される。まさに「叩きや  
すい者を叩く」という、いじ  
めの構図と同じである。いじ  
め問題を議論するとき、日本  
の社会、世論がこのような陥  
穽に落ちることのないよう、  
我々は今一度冷静さを取り戻  
すべきではないだろうか。学  
校が悪かったのか、悪くなか  
ったのか、悪かったとすれば  
どこがどう悪かったのか、再  
発防止のためには具体的に何  
をどう改善すればよいのか、  
本当の問題解決のためには冷  
静な検証と建設的な議論を地  
道に行うことが不可欠と思  
う。

いづれにせよ、今も未来も  
岐高生がこのような問題と無  
縁であるようお願いしたい。

## 「選択」に思う

原 祥子

(旧姓・伊藤)  
昭和59年卒

母校創立百三十五周年の知らせに、止まっていた記憶があふれるようによみがえってきました。三年の夏、袖口に100と刻まれたユニホームをまとい甲子園を目指した野球部は、あとひとつ勝てば夢が現実となるまで登りつめました。あの熱い想い。伝統と誇りと一体感と。幸せな高校生でした。

よくも悪くも人生の礎となり、大きな影響を与えられた三年間だったと思います。今私は広い意味での「言葉の世界」に身を置き、仕事をしていきますが、思えばこれも源はあの頃に出来上がっていたのかもしれない。「考える」ことについて考え、なるほどそういった観点もあるのかと他者

の意見に触れて更に考えた文集『わけを聞こう』なつかしい思い出です。

さて、今回のお題は「このごろ思うこと」。

考えをめぐらせていて、いつか読んだ本の中にあった「人生は選択の連続である」との一節が浮かびました。朝起きて何を食べ、何を着るかにはじまり、住むところも今年一年の過ごし方も、人はすべて自分で選択し、それを積み重ねているというのです。ふーん、そうかと思つた私は、ならばより意識して主体

的に物事を決めようと心がけはじめました。

明らかになってきたのは、自分は何かをはじめるとは比較的容易にできる。何事も最後まで頑張ることがすばらしいとインプットされてきていて、やり遂げる覚悟さえ決まればはじめの一步を踏み出すことはできるのだけれど、現在進行中の、それも特に長い間続けてきたものを「やめる」選択が難しい。いえ、実は難しいのではなく、現状を変えることに対する抵抗感、恐怖感が先にたつてしまい、今のままに安住してしまうのです。これって無難なように淋しい選択なのかも。続けるのなら他のあらゆる選択肢の中からこれがベストと信じて「継続」を選ぶようでありたいものです。

一方で、自分の意思ではどうにもならない、大きな力に動かされていることも感じながら、まだしばらくはバタバタとぶざまにもがいていたのと考えるこのごろにて。

## 平和について

江崎 公二

(旧姓・藤井)  
昭和49年卒

偉そうなことを言おうなどと思っていません。ただ、近年、近隣諸国からの危機感が煽られ、勇ましい声が聞こえる中、気になることがあります。太平洋戦争後、恒久の平和を念願する理念を打ち立てたのですが、その理念もどんどんなし崩しになって今では日本が昔、戦争をしたことすら知らない世代が増えて、戦争もゲーム感覚で受けとめられるのではないのでしょうか。

そこでお分ちしたいことは、『三酔人経緯問答』を書いた中江兆民が洋学紳士に語らせたことばです。兇暴の国が侵攻したらどうするかというナシヨナリスト豪傑君が投げかけた質問への答えです。「僕は断じてかくの如き兇暴の国なきを知る。「だが万一そのような侵略があった場合に



は」我衆一兵を持せず、一彈を帯びず、従容として言わんのみ。吾(わが)儕(せい)未だ礼を公等(きみら)に失ふことあらず……相共に治を施し政を為して争訟(そうこう)すること有ること無し、公等の来りて、吾儕の国事を乱すことを願はず、公等速やかに去りて国に帰れ、と。彼れ猶ほ聴かずして銃砲を装して我に擬する時は、我衆大声して言はんのみ、汝何ぞ無礼無義なるや、と。因りて弾を受けて死せんのみ。」(小林直樹著『憲法第九条』岩波新書より引用、pp.41-42)

その内容の大意ですが、たとえ方に一つ、侵略してくる国があったとしても、弾薬一

つ持たず、民衆は大声で「私たちほしかりと政治を行って国をおさめています。内輪もめなどしていません。あなたたちが入って来ることで国が乱れてしまいました。出て行ってください」と言います。相手がそれを聞かないで鉄砲を向けるなら、「何という無礼な。それなら弾を受けて死ぬだけだ」と毅然たる態度を取る。一般にはやられたらやり返すといった考えが当たり前の中で、この洋学紳士を通して語った中江兆民の考えも傾聴に値するのではないのでしょうか。

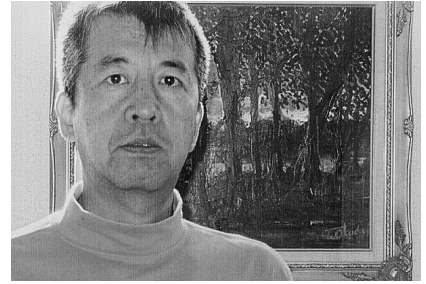
## 「医心方」と

### 三輪山

岡田恒良

昭和49年卒

「医師は治療に臨んで精神を統一し、欲得を捨て、慈悲の誓願をたて、魂あるものすべての病苦を除くことを心がけよ。救いを求める者に対しては、その身分の貴賤や貧



富、年齢を問わず、怨敵であろうと親しい者、善人であろうと、また田舎者と都会人、智慧と愚者などあらゆる差別を捨て去り、すべての人に親心で臨むべきである。右顧左眄せず、前後を見ず、日や方位、吉凶にとらわれたり、わが身を惜しんではならない。患者の苦しみをわがことのように思いやり、僻地であろうと、昼夜、寒暑、飢渴、疲労ものともせずただ一心に救いに赴くべきである。患者を往診したときは、どんなすばらしい邸宅でもキョロキョロしてはならない。どんなにおいしい御馳走や音楽でもてなしてくれても、楽しむのは恥ずべきである。多語、談笑、

けんかをせず、道を説いたり、是非を論じたり、名声を望んだり、他の医師をそしつたり、傲慢してはならない。自分を天下無双と思うのは、医師の膏肓（命取り）である。」これは、日本最古の医学書「医心方」の冒頭の言葉です。医者として本当に身につまされる内容です。医心方とは、984年に丹波康頼が著し、隋・唐時代以前の二百以上の文献から病気の養生、医師の心得など抜き出し、症例別に編集した日本最古の医学書です。著されてから約千年後の現在、榎佐知子さんの手によって、解り易い現代語訳

を鑑みて、出版の目途もなかなかつかなかったと聞きました。医心方の価値を知る外国の方からも激励や出版の勧めもあったようでしたが、ついに日本での出版が実現したそうです。現在図書館で借りて読んでいるところです。そんな頃、知人達と奈良に同行する機会がありました。三輪山の大神神社には、大己貴命、大物主神とも言われる大国主命が祭られています。大国主命は、少彦名命と共に医薬、病氣平癒の神様だったのです。参拝後、狭井神社境内から三輪山にも登頂しました。

となって全訳精解が筑摩書房から出版されています。このことをNHKラジオで知ったのはまだ数ヶ月前のことでした。難解な漢字が使用されていて、とても現代語訳はかなわないだろうと言われていたこの医心方でしたが、榎さんの卓越した語学力のお蔭でこうして現代人にも解かるような書にできあがったということです。また費用や発行部数

実は三輪山の前に石上神宮に立ち寄ったわけですが、そこには饒速日命の授かった十種神宝が祭ってありました。この中には古事記の中で大国主命が、根の国で使った神宝も入っています。十種神宝は、病や災いを救い、死者をも蘇えらせるものなのです。三箇所目に訪れた場所は交野市の磐船神社。神社にはその時の大きな磐船（巨石）が鎮

## 51歳の決断

川島慶文

昭和49年卒



五十一歳にして小沢一郎氏は自民党を離党し、安部晋三氏は総裁選への挑戦を決意したそうです（2006・9・

19朝日)。私は五十一歳になった昨年10月、高校教師を辞めました。いえいえ昨今の不祥事絡みではありません。老親が患ったので、看護をしながらできる仕事として、家の果樹園を継ぐことを決めました。

た。私の果物づくりは、最終的には健全な樹木づくりに行き着くのだろうな、など思っています。

二つめは、高付加価値農業の実現です。「地場資源を利用した高付加価値産業を興すこと」。これは、かつて私が

前々から「いつかは一次産業で」と思っていましたので、準備をなし温めてきたものがありました。その一つは、環境負荷の小さい農業の実現です。やがて就農することを見越し、私は八〇年代から除草剤の使用をいっさい止めました。除草剤を使用していたころ、畑の土は運動場のごとく固く締まって行きました。現在の樹園地はふかふかです。生えては刈られ、枯れる草。根は地中に空隙を作り、茎葉は有機物の源です。

山村問題を扱っていたときの管見ですが、「地方都市の暮らし易さ」についても当たっているように思います。農業の場合、輸入農産物にはない何か別の価値が認められて、生産者への対価が支払われれば、わが国の小農経営は安定します。それは地元の購買力となり、地方経済を底上げします。農地は活用され、結果として文化空間（景観・共同体・伝承）が保持されるでしょう。

微生物からモグラに至る、畑の生態系が機能しているように感じられます。もちろん化学合成農薬の削減にはこだわります。今年の柿の栽培では、従来の方法に対し、五五%の農薬散布で済ませまし

ところで私は「安全・安心・環境」といった価値を私の果物に付加したつもりではありませんが、しかし、なかなか。消費者に理解されてこそ、その価値は「初めて生じる」と気づかされました。私の農業経営が安定し、ひいて

は「岐阜市の暮らし易さ」に貢献できる日は来るのだろうか、ふと気弱に思ったりすることもあるのです。

さて皆様には、五十一歳にしてどんな決断の場面があったのでしょうか、と思うこのごろです。

## 寺院建築の明日はきっと明るいゾ

菅野 良 司

昭和49年卒

私は、二十五年以上寺院建築の設計を手がけています。菅野企画設計という設計事務所を経営していて、スタッフは八名、現在も十か寺以上の設計監理を手がけています。岐阜県内では、平成15年に火災で全焼した多治見市虎溪山永保寺再建の設計監理を担当

しています。日本の建築業界は長い間、自国の伝統に敬意や誇りを持たない時期が続きました。「お寺のデザインなんて皆同じだから、何か寺も設計するなんて退屈でしょう」。設計士は誰も彼も西洋風のデザインに夢中でした。

そんな環境の中で私はオリジナリティー溢れる寺を造ろうと孤軍奮闘してきました。何で頑張ったのか。頑張ったのか。やはり好きだったのでしょうか。お寺の設計が。それにしても、長い間、世界に誇れる木造技術や伝統的なデザインを軽視してきたのは何故だったのでしょうか。大学の建築学科の講義でも木造はほとんど教えなかったし、寺院のデザインは建築史に登場するだけだったのです。



ところがです、最近私の仕事に魅力を感じてくれる若者が、ひとりまたひとり門を叩いて来るようになりました。工事現場でも、宮大工や瓦葺き、桧皮葺きなど、若い職

人が生き生きと仕事をしています。全く目を疑うような光景です。「時代は変わったんやなあ」とつくづく感じます。とても、とても嬉しいことです。しかし、喜んでばかりはいられない。伝統を守るだけでは不十分なのです。伝統的な技術をただ伝えるだけでは必ず陳腐化してしまいます。次の世代が魅力を感じるだけの創造性が必要です。さてこれからだ、と私は思っています。やる気のある若者と一緒に次の時代につながる仕事を是非手がけていきたい。そう思っています。

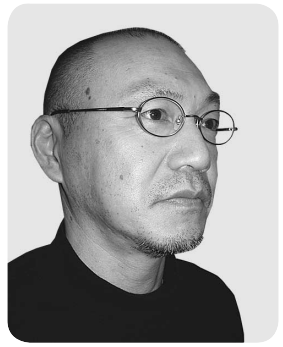
## ガンバレ

### 岐高卒業生

木村 敏 男

昭和49年卒

昨年11月、同窓会に参加した。岐高卒業以来、同窓会なものを見ていたわけでもないが、今までは出席する必要性を感じなかったためであ



靴で登校しておしかりを受けた

一、高校生だけで喫茶店に入っ  
てはならなかった。不良少年が好むといわれているロックがBGMで流れていたらなおさらだ

り、五十歳ともなると自分が同年代の中で精神的に、肉体的に、外見的に、毛髮的に若いのか老けているのかを知りたくなったためその気になった。

当日出席されたほとんどのかたが、私にとっては約三十年ぶりの再会であった(実のところ半数は初対面であった。ひょっとしたら高校時代の私はシカトといういじめにあっていったのかも)。

さすがに岐高の卒業生だけあって皆それなりに立派におなりでしたが、奇人変人有名な人のたぐいは皆無でした。これもまたさすがに岐阜高校である。で、『高校時代の私にはあたりまえの事と感じていたけど、今から思うとかなり変』な事を挙げてみたい。

一、赤尾好夫の単語帳からのテストを毎日受けさせていただけだ。おかげでその後、笑い者になるいいネタを仕入れることができた(外国人も知らない単語や諺まで知っているのに「今日は暇かい?」と英語で訊かれると「パードン」の連続になったりして彼をきょとんとさせたことがある) などなど要するに独創性とか個性とかいう、大学入試には不必要な芽は早めに摘み取り、オンリーワンよりもナンバーワンを目指すという教育を受けていたわけなんです。

一生のうち一番多感な時期で、それぞれが自分色の花を咲かせる準備をすべき時に没個性教育を受けました。中学までに自我形成の完了していた一部の早熟野郎ならともかく、大多数の少女少女は知らないうちに金太郎飴にされていたよね。いわゆる一流大学に進み、一流企業に就職し、良い社会人になるための教育だったのかなあ。なにもそのことを否定するつもりはないし、私が今この、そんなに立派とはいえないけれどもまあ自分では満足できているポジションにいられるのも岐高で高校生活を送ったからだと思いがたく思っている。

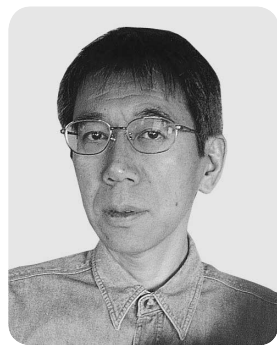
しかし時代を変えられる人間は岐高からは非常に生まれていく、また実際に生まれていないという事実を少し寂しく感じている。ホリエモンや村上世彰のような(善悪の評価は人それぞれだろうけど)スケールの大きな人物が岐高卒業生の中から出てきて欲しいとも思っている。「おたくの高校の卒業生で誰がいる?」と尋ねられたとき「名前は忘れたけど、『悲しい色やね』を歌っていた人くらいかなあ」としか答えられないのもつらいものがある。

もうやり直しのきかない年齢になった私から、人生まだやり直しのきく若い世代の同じ金太郎マークの断面図を持っているであろう皆さんにエールを贈ります。ガンバレ岐高卒業生!

## 中高年

### ロックバンド

林 正  
昭和49年卒



れる日々を送ってきた。

しかし頭の片隅ではいつもギターの事を考え、もう一度ステージに立つ自分を思い描いていた。ギターに関する新たな知識も増えていった。

①「〜でありながら〜である」という相反する要素を併せ持つところから味わいある音色が生まれる。

②スタンダードなモデルにはそれなりの意味があり、浅智恵であれこれ手を加えても、改良になるとは限らない。

③どんなギターにもそれぞれ特性があり、オールマイティなギターは存在しない。

このような事が分かってきたのは、四十歳をすぎ音楽活動を断念した後であった。五十歳になっても音楽への情熱はさめやらず、ライフワークとして音楽活動を続けるために、中高年ロックバンドを結成することを決意した。

現在、自分の自由時間はあまりない。遅々たる歩みになるのは分かっているが、とにかく第一歩を踏み出した。新バンドでは、できるだけ

オリジナル曲で勝負するつもりである。世間によくある懐古的なオールディーズバンドにはしたくなかった。好きな音楽を消化吸収し、さて、そこから自分には何が生み出せるかを試してみたい。演奏レベルの高いバンドで広く世間一般の人の前でライブ活動をし、CDを発売して各地に音を届けたいという夢を持っている。伊能忠敬のように、隠居してからも活動したいと考えている。

## 懐古趣味的

### 岐阜論

細江 茂光

昭和42年卒



わが故郷・岐阜の原風景、特に幼少から高校生時代を思

い浮かべてみると、学校にも、公園にも、家庭にも子供が溢れていました。子供から年寄りまでのバランスがうまく取れた社会は、それぞれの年代別、熟度別の分担がうまく機能していました。子供たちは両親やお爺ちゃん、お婆ちゃんばかりか、隣近所のおじさん、おばさんからも怒られたり褒められたりしながら多くを学びました。自由書房や大衆書房にはずらり並んだ参考書、小説、雑誌を求め年代を問わず多くの人々で溢れていました。テレビが普及し始めたばかりの時代、唯一の娯楽ともいえる映画館が林立する柳ヶ瀬通りは劇場も食堂も商店も人が溢れ、まさに肩触れ合うばかりの賑わい。今も懐かしく思い出されます。

られる、ライフスタイルなどの社会状況の変化や統治システムなど国の形の変化を度外視した荒っぽい議論には首を傾げざるを得ません。社会はその経済的成熟度や文化的、科学的成熟度によって違った姿を見せるものです。センチメンタリズムなどの感情論を排しながら、冷静に過去から多くを学ぶことは有意義です。先人の知恵、歴史が積み上げた叡智は多くの示唆に富むからです。

柳ヶ瀬周辺の往時の隆盛を忘れられない人は多いと思います。映画以外の娯楽の氾濫、モータリゼーションの進展による郊外居住、郊外大型店の出店などライフスタイルが大きく変化する中、旧中心商店街は新たな対応を強いられています。生活圏の拡大、趣味の多様化の中で求められるものは、スマップの歌ではありませんが「世界に一つだけの花」ならぬ、他に追随を許さない獨創性です。郊外型店舗では真似のできない、例えば柳並木の続く自然の中を

ゆっくり歩き、散策を楽しむながらショッピングができる環境などは現代人の心を捉えるのではないのでしょうか？ 高齢化社会を迎え、自家用車から公共交通に乗り換えた高齢の人たちがゆっくり散策を楽しむ商店街、いいと思います。せんか？ 人間性を回復できる商店街、中心市街地活性化策の一つの理想ではないでしょうか。

## あの街この街を歩きたい

前田 陽代

(旧姓・恩田)  
昭和41年卒



生まれも育ちも岐阜市で、結婚を機会に東京近郊で暮らすようになり三十年以上たちました。会員制街歩きの家

「グループトウンウォッチング」を主宰して、すでに十五年になります。会員は首都圏各地から約五百人の方が毎月参加して、定例会は通算三千回以上に。

新聞や雑誌の連載や書籍などを含めて街歩きを仕事としている人はそれほど多くはありません。今でこそ「街歩き」という言葉もよく使われるようになりましたが、先駆けであったことに若干の自負を持っています。

一つの街を五時間で歩くコースを作り、訪問した街は百三十タウン以上になりました。グループを結成した当初は、東京生まれの人には、見知った街が観光の対象になることによく驚かれました。それは私が地方都市の出身者であることで、眼のつけどころが違ったからでしょう。どのようないきさつで始めたのか。

子育ても一段落したころに、ふっと東京での生活を見直してみました。毎日のニュースに東京の街が出てこない



ことはないのに、情報発信地の東京の街を全く歩いたこと  
はなかったのです。国会はも  
ちろん、霞が関がどこにある  
かも知らずに、有名な街さえ  
よく知らないことに愕然とし  
ました。個人ではなくグルー  
プだからこそ見学が許され、  
説明していただける、という  
グループで街を歩くメリット  
を考えて会員制の街歩きグル  
ープを立ち上げたのです。

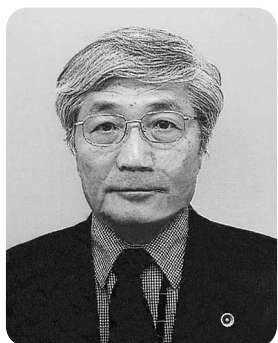
クチコミやマスコミの情報  
で会員になった人の在籍期間  
は長く、名古屋から新幹線  
で十年以上参加している方も  
います。会員は「ワクワク、  
ドキドキ」した気分、これが  
満足感になって、タウンウォ  
ッチングを続けてきた、と言  
います。一緒に参加した人達  
との途中での「語らいや心遣  
い」に触れ、専業主婦として  
過ごす日々と違った別の時間  
を持てた事に、人間としての  
膨らみを増すことができたな  
どと感謝されています。  
私の場合は、趣味が仕事に  
なった幸運な例で、これも健  
康と好奇心という心身のバラ

ンスの上に成り立つものと考  
え、健康に留意しながら、で  
きるだけ長く続けていきたい  
と考えているこのごろです。  
上京の折には一日体験をどう  
ぞ。HP「お散歩ナビ」  
<http://www.osanponavi.com/>

## 紛争の原因と 人の脳

片桐 勇 碩

昭和39年卒



私は、愛知県弁護士会に登  
録し、在籍三十年以上になり  
ました。一般民事・家事・商  
事・医療・労働・公害・刑  
事・少年事件など様々な問題  
や紛争に出会い、解決に奔走  
してきました。依頼者からの  
信頼が得られる結果になるよ  
う努力してきたつもりです

が、紛争の決着が依頼者の方  
の満足を得られたかどうかに  
いつも心を配らなければなり  
ません。

どのような解決が依頼者に  
とって最も望ましいのか、裁  
判や事件に現れた事象の原因  
を考えなければならぬと思  
います。その人がおかれた環  
境や人間の「心」や「脳」の  
問題、その病的状態を考える  
必要があるように思います。  
何故、犯罪や紛争が起こるの  
か、その原因の一つに様々な  
ストレスが人間の心や脳に傷  
を与え、それが「感情的」  
「非合理的」な人間行動に結  
びついているのではないかと  
思っています。

裁判手続では、人間の心や  
脳に発生した問題までは、な  
かなか究明したり解決できま  
せん。夫婦の離婚紛争などで  
は当事者が蒙った精神的スト  
レス、これにより抑うつ状  
態、うつ病になって、これを  
原因として相互の不合理な行  
動による紛争が起こります。  
犯罪被害者は、大きな心的障  
害を受けることが多いのです

が、加害者が刑事事件で処罰  
されただけでは、そのような  
被害者の心や脳の心的障害は  
改善されません。

私が扱った少年事件では、  
母親から虐待によるストレス  
を受け続けた少年が、そのス  
トレスを原因として、海馬の  
萎縮、前頭葉の機能低下、脳  
内神経伝達物質であるセロト  
ニンの供給不足、ノルアドレ  
ナリンの過剰等、脳の構造が  
変わり犯罪を犯してしまうの  
ではないかという問題があり  
ました。虐待は積極的暴力的  
なものだけではなく放置（ネ  
グレクト）など愛情がなくて冷  
たい状況に置かれ続けられた  
場合も含まれます。その少年が  
少年院や刑務所に収容されて  
もその少年の「脳の病的状態」  
は改善されません。ストレス  
によって病的状態になったの  
ですから、少年院や刑務所で  
ストレスを受け続ければ逆に  
改善しないし、再犯の可能性  
が残るのです。何故、少年が  
犯罪を犯したかの原因をもっ  
と深く探って病的状態を改  
善、治療という方法を取らな

いといけないと思われま

成人の犯罪の多くにも、ス  
トレスを受けた「脳」が原因  
して犯罪を犯してしまうとい  
うケースがあります。犯罪の  
原因が何らかの虐待経験に起  
因している場合が多いから刑  
務所で服役すれば改善する  
というものではありません。心  
の治療、改善をしないと再び  
犯罪を犯してしまいます。ア  
メリカのNPOであるアミテ  
ィのグループは、刑期を終え  
る直前の囚人に刑務所内にお  
いて囚人の生育歴における虐  
待経験などを語らせるアミテ  
ィのプログラム「集団カウ  
ンセリング」を行った結果、再  
犯率を半減させました。この  
実績により、アミティは、当  
時のクリントン大統領から表  
彰されています。

抑うつ状態やうつ病の人、  
心的障害を持った人は、臨床  
心理士などによるカウンセリ  
ングや薬を併用する治療によ  
って改善します。抑うつ状態  
やうつ病の人、心的障害は、脳  
内伝達物質といわれているセ  
ロトニンが少なくなることが

原因だとされており、このセロトニンをコントロールする薬 SSRI (Selective Serotonin Reuptake Inhibitor: 選択的セロトニン再取り込み抑制剤) は、副作用も少なく、うつ病などの心的障害に効果があるとされています。

年間三万人を超すといわれている自殺者の多くは、虐待や過度なストレスなどによる心的障害が原因していると思われる。心や脳の病的症状が原因しているのですからこれを予防的にカウンセリングによる修復、薬による治療するシステム、例えば、臨床心理士の制度化や充実がなされ、薬の服用により自殺の予防を図る必要があります。

修復的司法 (リストラティブ・ジャスティス Restorative Justice) は、刑罰は、犯罪に対する応報として犯罪の加害者を処罰するという考えではなく、「犯罪による被害の回復」であるという発想をしています。「被害の回復、償い」がその責任の本質であり、犯罪によって傷つくもの

は、「犯罪被害者」「地域社会」「加害者自身」であると考え、被害者の受けた心的障害を修復するとともに、加害者が犯罪行為の意味を理解し責任を自覚するためには、加害者自身が犯罪に至るまでに受けてきた暴力、虐待、いじめ、差別などによる心的障害等を理解し、心的障害を修復することが必要であり、加害者に脳の病的変化があればこれを治療し、修復することが必要であると思われます。

弁護士「弁」という漢字は、花びらの花弁の「弁」で、一枚一枚の花びらが分かれているところから「分ける」という意味があるようです。弁護士のバッジは、ひまわりの「花弁」がデザインされています。「弁別」「弁識」などの言葉も「分ける」という意味が含まれています。弁護は、理由などを主張して人を護るという意味ですが、私は、「弁護士」は、「理由が合理的であるかどうかを分けて」「護」る「士」であると思っています。事件や紛争が

おきたら「合理的であるか」「合理的でないか」を「分けて」「基本的人権を護るという仕事です。地球上の事象は、原因があって結果があるという因果の法則に支配されています。すべての過去の事実、どのような原因があつてどのような結果が起つていったかの合理的説明がつきまです。人間行動や脳の原因を科学的に解明することが紛争解決のためになるように思っています。

## 微生物と

### 希土愛楽

河合 啓一

昭和39年卒



私の勤めている岐阜大学応用生物科学部食品生命科学課

程の学生さんに「希土類ってどんなものか知っていますか?」と問いかけると、ほとんどの学生から「知りませぬ」の答えが返ってきます。それでも、「希土類元素は周期表の欄外にあるランタノイドのことだよ」と言うと、学生さんは思い出したように「そういえばそんな元素群があつたなあ」と相槌を打ってくれます。

希土類元素とは、スカンジウムとイットリウムに15元素からなるランタノイドを合わせた17元素の総称です。高校時代に化学を一所懸命に勉強して入学してくれた学生さんですらこのような状況です。で、一般社会では希土類元素はほとんど知られていません。

しかし、希土類元素は身近なところで活躍している重要な元素です。携帯電話、コンピュータ、自動車、デジタルカメラや小型ビデオなどのほかレーザー、光磁気ディスクや蛍光灯などに用いられています。また先端医療機器であるMRIやCTにも用いら

れており、さらには鉄鋼業や原子力産業にも用いられています。このように羅列すると、希土類元素は先端科学技術を駆使して製造されている高度工業製品に不可欠なもので、高度工業化、情報化社会を支えている重要な元素群であることをご理解いただけると思います。日本には希土類鉱脈はありませんが、幸い世界的に見ればその埋蔵量は結構大量にあり、資源的に枯渇することは当分心配ありませんが、戦略物質になる可能性は十分あります。

ご承知のように技術革新のテンポが速いため、特に電子情報通信機器類は使用寿命が短くなつており、これらの機器類が大量廃棄され、希土類元素が自然界に放出される状況になってきています。当然のことながら、希土類元素は生体に何らかの影響を及ぼすのではないかと、という疑問が起きます。今のところ、希土類鉱物の採掘や精錬にかかわる人に悪影響があつたとする報告はありません。ただ

し、希土類元素が本格的に利用されたのはカラーテレビの鮮明度が改善された一九七〇年代中頃からで、三十年ほどしか経っていませんので、希土類元素の生体への影響が未だ顕在化していないためだけかもしれません。

このような背景から、私は研究テーマとして環境変化に比較的敏感に応答する微生物を対象に、希土類元素と微生物とのかわりについて研究を進めてきました。この研究を始めた当初は希土類元素特有の性質によっていろいろな困難に遭遇しましたが、一年近く時間をかけて実験が実施可能となるような条件を確立することができ、あとは夢中になって実験を進めるだけでした。研究がうまくいくかどうかはわからない状況でしたので、学生さんをおだてながら励ましながら進めはしましたが、内心穏やかではありませんでした。一種の賭けのような研究でしたが、しばらく続けていると、卒業研究に携わっていたある学生さんが大

変興味深い微生物を探し出してくれました。学生さんが「微生物の狩人」として日夜活躍してくれていることについては「岐阜新聞、平成13年1月28日朝刊、研究室から大学はいま」に書かせていただきました。

最初に発見してくれた微生物は細菌（納豆菌や乳酸菌も細菌の仲間です）の一種でした。この細菌は土壌中に見られるもので、希土類元素の一種であるセリウム（ガラス研磨剤やライターに用いられています）があると細胞の周りにヌルヌルしたものを大量に作る特徴を持っていました。もちろんセリウムがない場合にはまったく作りません。その後、別の学生さんが、テレビディスプレイの赤色発光体として用いられているユウロピウムが存在すると増殖が促進される細菌を見つけてくれました。この細菌はメチルアルコールが大好きのようにです。現在、この細菌を使って大学院の女子学生が頑張ってくれています。早く面白い結

果を出してほしいと願うばかりです。

ここではほんの二例しか紹介できませんでしたが、希土類元素と微生物とのかわりは、まだまだ多くの未知の世界が広がっているように思えます。エネルギーと環境に関する諸問題の解決策の一つとしてバイオの活用が挙げられています。有用な機能を持った微生物のハンティングはこれから重要な研究テーマであり、バイオ産業の担い手として微生物の活用が大いに期待されます。

## 平成の改革

中島 加寿子

(旧姓・大庭)  
昭和39年卒

昭和20年生まれの我々は、日本の戦後史と共に歩んできた。物資の乏しい時代も記憶にある。めざましい高度経済成長。そして今、急激な社会変化を感じる。

内閣府のHPをのぞくと、



イノベーションの文字が目に入り、国民から意見を聞く窓口がある。誰でもアイデアを出せるのはIT時代の変化の一つ。また、現在二万八千以上のNPO法人がある。「NPOって政府の外郭団体？」と問う人もいるほど、世間の認知度が低い現在、認可された数が多いのが不可解。「解らなければ飛び込む」が、私の昔からの悪い癖。

そこへ行政の補助を受けない自主自立のNPOに出合った。某企業の経営者が、法務省OBに「本物のNPOを作ってくれ」と懇願され、それに応えるために作ったそうだ。自社の利益からNPOの活動費を出すなど、経営者は勇気が要ることだろう。十年前、本気で国を憂う官僚がいたということだ。

私は、会ったことのない元官僚に親しみを覚え、内閣府認証NPO法人グリーンヘルプジャパンに加入した。活動内容十七項目を網羅するNPOだが、まずは身近な実践として、九十年の歴史を持つ「宝塚」の芸術支援をした。これは高齢者や引きこもりがちの主婦たちが、楽しみながら地域に溶け込めるきっかけになった。NPO活動の一つ「明るい街づくり」に適合する。構えて入会したNPOであったが、さほど難しいことではなかった。

日本が科学技術創造立国と宣言したこともあり、今後、世界の中で日本がどんな役割を担うのかと楽しみだ。昔から自然と共生してきた日本だから、自然科学の分野で画期的な発明があるかもしれない、などと期待する。人間がここ百年余に壊してきた地球環境は、人間の知恵で修復するしかないのだから。

## ハルピン街に 思いを寄せて

―激変する中国

宮崎 正

昭和39年卒



小学生の頃だろうか、母親に連れられ岐阜駅前「ハルピン街」に何度か出掛けた。繊維問屋街、今風に言えばアパレルの街ということになる。

敗戦とともに旧満州から引き揚げた人たちが多く住んだのが街名の由来というが、当時、そうした知識はなく、カタカナの街名を持つモダンな響き、あふれる人の熱気と喧騒が、田舎育ちの自分には刺激的で、奇妙な興奮を覚えたのを記憶している。

この街名は今も残っているのだろうか。たまの里帰り

で駅前に降り立つと、幼時の印象は錯覚だったかと思うほどの静けさ。寂しささえ感じる。

アドバイザーを務めるNGOの事業の関係で昨秋、当のハルピン(現地発音)を再訪した。最初の訪問は二十年前。日中両国政府の間で合意した中国残留日本人孤児の肉親探しの取材でハルピンを基点に二週間ほど農村を回った。

中ソ対立のためか、市内は灯火管制が敷かれ、暗闇の中を濃紺の人民服に身を固めた労働者が黙々と歩く。残る記憶はほとんど黒一色、モノトーンの世界であった。

そして今回。繁華街では赤や緑の原色のネオンがまばゆいばかりに輝き、街全体がカラフルな世界に一変していた。夜、地元の人が「バー」と呼ぶ酒場に出掛けると、ロックスのリズムが鳴り響く大型ステージで半裸のロシア人女性が体をくねらせ、フロアではジーンズ姿の中国人の若者が激しく踊る。壁にはにっこりと微笑むマリリン・モンロー

ーのパネル。

呆然とビールを飲んでいると、店の関係者だろうか、若い女性が「一〇〇円で一服いかが」と大型のパイプを差し出した。さすがに断ったが、同行の中国人は「マリファナですよ。深夜になれば覚せい剤も売りにくる」と説明した。

改革解放以来、急速な変化が進む中国では、過去には想像もできなかった大胆な発言も聞かれるようになった。政府批判のデモも増加する一方だ。共産党独裁を否定する発言や友好国である北朝鮮を公然と敵視する声も耳にする。

社会主義と資本主義が渾然一体となって進み、「新富人」と呼ばれる一部富裕層と農民、都市下層民との格差が想像を絶するまでに拡大している。引き続き共産党独裁を維持して行くのは容易であるまい。中国政府が歓迎する各国の「経済進出」も何時、「経済侵略」に政策転換されるか分からない危うさを秘めている。そんな隣国を引き続き見守りたいと思う。広い中国のど

こかで、岐阜の痕跡に出会う幸運に恵まれるかもしれない。

## 岐阜高校

### 交遊録

毛利 俊夫

昭和39年卒



岐阜を離れて四十年余、東京生活が岐阜の時代の二倍にもなり、両親もいなくなった今日、岐阜と私を結びつけるのは、ともに学んだ友人たちである。というより、ともに汗を掻いた柔道部仲間であり、また同窓会という糸でつながる友人である。

柔道部も同窓会もその繋がりを維持できたのは、ひとえに田中忠君と木村征司(旧姓・日江)君の奮闘のおかげである。かねてから木村君は

在京組を取りまとめていたが、田中君の二度にわたる東京駐在は、我々年度の同窓会で在京グループと岐阜グループを結びつける上で重要な役割を果たしている。田中君が岐阜へ帰ったあとの在京組は木村君が転動で東京を離れたため、井口道郎君が幹事としてまとめている。

人間は生れ落ちた瞬間から、様々な社会的つながりを作り続ける。その無数のつながりの糸を自分なりに編集して各人独特の社会を構築していく。

一本一本の糸は大変細いものであるが、それらが複雑に絡み合っって個性豊かな社会空間をつくるのである。糸の数が多いいほど、また糸の種類が多様であるほどそれが形作る社会空間は魅力的になる。言い換えれば、その人が魅力的になる。

ほとんどの人は、学校、地域、会社など同じような社会空間との接点を持っているが、それらの社会空間と自らの社会空間を結ぶ糸は自然に

出来るものではない。多くの場合、誰かが糸を紡ぐ努力をしているのであり、その努力の結果を利用するかどうかは個々人の問題である。

前述の木村・田中・井口の三君の努力がなかったら、私の岐阜高校との糸は紡がれることなく、したがって、わたしの空間には岐阜が存在しなかったといっても良い。

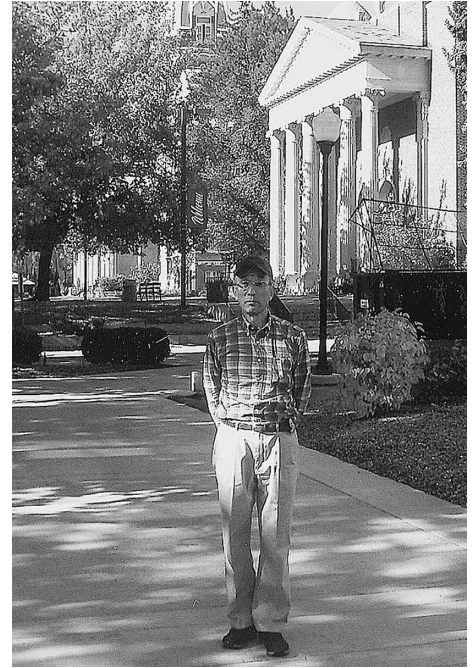
自分で選んで生まれ育った土地ではないのだから、岐阜にこだわりすぎる必要はないが、それでも私は多くの友人が紡いでくれた糸をさらに太く、また多様にして、小さな私の社会の中ではあるが、岐阜の存在をさらに大きくし、豊かで、楽しいものにしてほしいと考えている。

## 柔軟に

山下 晃 功

昭和39年卒

時は今、大変化、大改革の荒波のまっただ中にさしかか



っている。でも小生、不思議にも、心穏やかに船酔いもせず、心を乱すこともなく、この荒波に身を任せることができている。なぜだろう？ どうしてだろう？ こんなことを、ふと思う六十一歳である。今やっと、不惑の年を迎えているのだろうか。はたまた感覚が鈍くなったのか。いや、今更動揺してどうするかとの居直りだろうか。人生を振り返るターニング・ポイントにさしかかった。年を取ることが良いことだ。世相が見えてくる。

人生スローガン、「身の程を知る」「前向きをあきらめ」「人のやらないことをやる」

で人生の三分の二を歩いてきた。「時代」は流れである、流れは変化する、流れに巧みに乗りながら、状況を的確に判断しながら、世の中の変化に柔軟に対応していくことの重要性を痛感する。若々しい柔軟な肉体で、いつまでも変化に柔軟に対応できる身体でいたい。

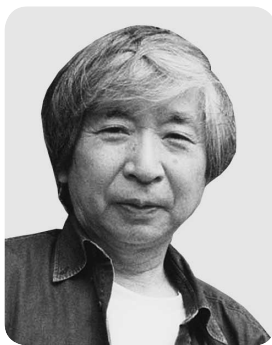
## カンのこと

—昨年12月7日、敬愛する先輩にして親しい友人、大野寛さんが亡くなりました

横山 信 治

昭和39年卒

私の岐阜高校入学は1996



1年年春。日本を席卷し岐阜の少なからぬ生徒をも巻き込んだ六〇年安保闘争の余熱の中であったでしょう。しかし、稲葉郡の田圃の中の中学生だった私には、そんな熱気に対する感受性を持つ余裕はなく、入学した学校の「都会的」文化と雰囲気におびえました。

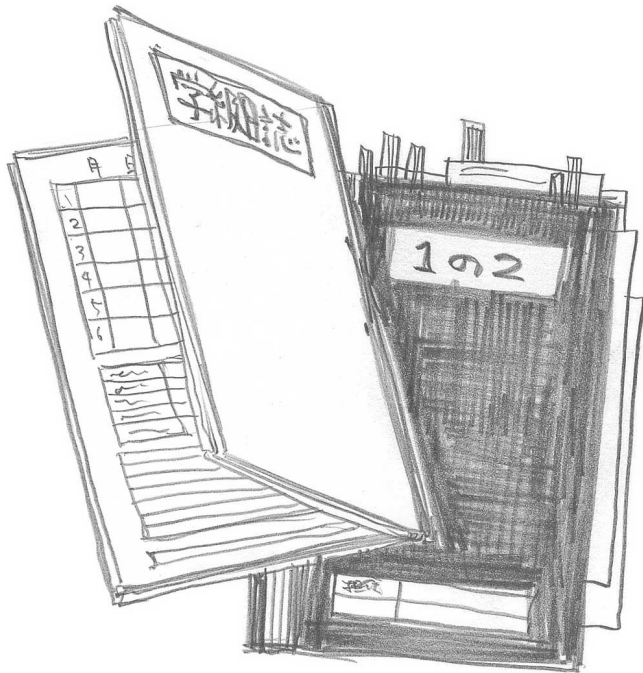
担任は、今では岐阜を代表する知識人こぼやしひろし先生でした。三十代半ばの先生は我々を子供扱いせず、自分の歴史や社会、演劇に対する情熱をナマにぶつけてくれました。これは私の人生の最初で最大のカルチャーショックでした。そして、演劇など好きでもなく興味もなかったのに、何人かのクラスメートの後についてフラフラと演劇部に足を踏み入れたのです。

二年生の太野寛がそこにいました。演劇部に相応しい「文化的」「政治的」先輩部員達の中で、彼は異彩をはなっていました。軟弱を憎み、権威を拒否し、政治的議論を無視して、ひたすら怒っていたのです。誰も彼を本名でよばず、「カン」とよびました。癩癩持ちの「カン」です。この人がなぜ演劇部にいるのか、私には理解できないままに、その迫力に圧倒されました。

演劇には舞台装置を用います。かなりの大きさのベニヤ板の構造物で、芝居が終われば無用の長物です。ある冬の日の放課後、我々は部室に大量に堆積していたそれを校庭のゴミ捨て場に運び、燃やし始めました。巨大な舞台装置の残骸は、体育館の屋根にとどきそうな炎を上げ始め、私は恐怖を覚えました。しかし我々を指揮していたカンは一歩も引かず、炎は彼の何者かへの怒りを代弁して燃えさかりました。その時、事務長のKさんが血相を変えてとんで

来たのです。いや、我々は、誰も事務長の顔など知りません。しかし、私にはそれが誰であれ、学校を管理する「大人」の当然の行動であると思われ、すぐに火を消さねばとうろたえました。その時、叱責の声を上げる事務長に向かって、カンはいよいよ放ったのです。「あんた誰や」。我々は全員「生徒課」に連行され、Y先生やT先生に大目玉を食らったものです。

カンは、名大の医学部に進学しました。彼が医者を目指すという意外な感じもしましたが、その断固とした意志に納得もしました。偶然ですが、私も医学部へ進学し岐阜を離れました。この頃の医学部は「激動の季節」で、私たちは時代の空気の中でそれぞれの学生生活を送り、卒業して医者になって行きました。岐阜に帰省して時々彼に会うこともありましたが、お互いにそれなりに忙しく、彼が学生生活や病院勤務で数々の抱腹絶倒の武勇伝を残しつつ、結婚し若くして関市で開業す



る頃は、私も国内外を転戦して、十分な交流は持てませんでした。しかし、彼が地域医療に慕進し、こぼやしひろし先生一家の「ちからもち」主治医としても大奮闘していたことは知っていました。そのような中で、カンの「怒り」には磨きが掛かり、この世のあらゆる不正義、不合理、理不尽に向けられた爆

発という明確なたちをとるようになっていました。しかしそれは、カンの途方もなく優しい感性との間でのせめぎ合いとなり、彼の中で制御できない葛藤が生まれていったかわけた葛藤です。十年ほど前、私は、長年住み慣れたカナダを離れて三十余年ぶりで濃尾平野に戻って

来ました。私とカンの交流はまた頻繁になりました。義母や両親をはじめ年老いた係累をいろいろ抱える身にとって、身近の親しい開業医ほど頼りになる存在はなく、知らず知らずのうちに彼に甘えることが多くなって行きました。そして、不用意にも彼の酒につき合うことが増えていきました。それは何時も楽しい酒でした。そう遠くない日に、カンと酒を酌み交わしながらゆったりとした老後の日々を過ごせるようになる、いつかそう思うようになっておりました。

2006年、こぼやし家でいつものように楽しく正月酒を飲んで別れた直後の2月、思いがけない彼の発病を知ったのです。進行したアルコール性肝硬変に肝臓の合併。本人にとっても、身近にいた私にとっても、これは恥ずべき事態でした。

肝臓移植の可能性が消え、肝硬変の管理と局所への抗ガン剤治療が比較的うまく行くまで数ヶ月間、カンの診療所

に通う慢性管理が必要な患者さん達に、彼に代わって「大野先生が戻ってくるまで、よそで薬をもらって欲しい」と頼むと、少なからぬ人たちが「そんな義理の悪いことはできません、大野先生が帰って見えなまで医者には行かん」と拒否され閉口しました。私は、これだけでも彼のこれまでの人生は十分に報われている、と思いました。

カンは、9月になって、部分的に診療を再開しました。患者さんも戻ってきました。疲れやすいから、と午後は昼寝をしながら、毒舌も少しずつ復活して来ました。小春日和のような日々がしばらくは続くであろうと、私達は思い始めていました。「インフルエンザの予防注射に来い」と11月下旬、カンから電話があり、12月9日には行けるからと返事をし、用意をしていた矢先の6日の朝の出来事でした。出勤途上で、彼の車はガイドレールに激突しました。肝硬変に対し辛うじて維持されていた彼の内臓は衝撃に耐

えられず、出血が続き、翌日の夜、息を引き取りました。注射の予定は彼の葬儀になってしまいました。

今日、医療を巡る問題は複雑多岐、何が問題で何をしたらよいのか、議論は巡り巡って答えは見つからず、人々は疲労困憊し始めています。その中で、私は還暦を過ぎるまで中途半端な大学暮らしをしてしまいました。カンは人生に単純で明解な答えを求めて、地域医療に飛び込みました。そして、自らの断固とした信念にのみ忠実に生き、そして逝ってしまいました。その人生は、十分に報われたものであった、と思います。しかし、彼が、世の理不尽・不正義に対するその怒りと内面の優しさとのせめぎ合いに耐えきれず、自らを滅ぼしてしまったのもまた現実でした。残された我々は、自らも残り少ない老後を、彼の怒りに対して申し訳の立つ人生で全うできるのか、と自問し始めています。

## 近頃

### 高等学校事情

石井 直子

(旧姓・後藤)  
昭和35年卒



ボーイスカウトがイギリスに生まれて、百年になります。百年前にボーイスカウトが生まれた理由は、興味深さを越えて、今の日本に警鐘を鳴らすものだと、私は思います。百年前のイギリスは、仕事をしないフリーガン(ごろうつき)の若者が町をうろつき、女の子は、街角で娼婦として客引きをするといった、困った社会状況だったといえます。その原因は、大人たちが、次世代の教育に熱心ではなく、子どもたちをばしした金で使って、生活を支える技術

を身に付けさせることなく成人させた結果でした。こんな世相を見て、規律正しい生活で心と体を健康にし、技術を持って人に役立つ子どもを育てようとしたのが、ボーイスカウト、ガールスカウトの創始者ベーデンポウエル卿でした。

それから百年後の日本。仕事をしない若者が家に引きこもったり、出会い系サイトを利用して、娼婦まがいの仕事をしたりする女の子もいるという困った世相となりました。それは、イギリスとは違い、日本の大人が次世代教育に熱心なあまり、受験戦争だ、ゆとり教育だと子どもに安定した教育環境を与えず、落ちこぼれる子をもてあましている結果ではないでしょうか。

生活を支える技術や手段も身に付けずにそのまま大人になって、生活に行き詰まり、気持ちの赴くまま暴力を振るったり、罪を犯したりする社会状況は、現実のものです。では、大人は次世代のため

に、今、何をしたらよいのでしょうか? それは、子どもたちに、幸福な一生を送れる方法を身に付けさせることであり、私は思います。就労意識と仕事への責任感、技術を習得するための自己学習能力の伸長は将来、生活の糧を得るための大切な学習です。それらは、規則正しい生活、健康な心と体であってこそ意味あるものです。

私が現在運営しているのは文部科学省管轄の「技能連携高校」というシステムで、専門学校が「生きる力」となる技術を教え、連携している高等学校が教料を教えて、三年間で高校普通科卒業と同時に技術も身に付くという学校で、私たちが高校生だったころにはなかった形態です。毎日規則正しく通学し、単位を取得して卒業します。また、スペシャリスト教育を並行している、それにふさわしく「役立つために自分を磨く」をモットーとしました。

ところで、昨今、高校卒業の資格を取るための「サポート校」があちこちに進出したのをご存じですか? 通信制高校と契約した(または高校が経営する)サポート校が、生徒を集めてレポートの指導をして、まとめてその高校にレポートを送り、生徒は月に一・二回とか、年にまとめて一回とか高校で授業を受け卒業資格を得ます。サポート校というと、いかにも学校のようには聞こえますが無認可で、学校ではないので、アパートの一室でも開業が出来、資格のない人が指導しても違法ではありません。通信制高校が下請けを設けてはいけないう規則はありませんから、合法的なシステムといえます。

ただし、生徒はサポート校にも、資格を発行する通信制高校にも授業料を払う必要があり、その金額の大きさが新聞を騒がせた例もあります。もっとも生徒にしてみれば、毎日登校を強制されることも、制服の乱れや髪の色をうるさく言われることもなく、人との接触のわずらわし

さや、いじめの心配もなく、小遣い稼ぎの時間もあって、自分の思うままの生活時間に合わせてくれて高校卒業資格が取れるこのシステムは、親切で、子どもによっては、ニーズに合った有難いものといえます。

たしかに、子どものニーズにあったものをサービスするのは経済行為としては正しいでしょう。しかし、魂の柔らかいこの時期につけるべき社会性や規範意識、職業観や社会貢献意識などはこのシステムで、果たして育つのでしょうか？

けんかで涙しながら人との関係のとり方を覚え、朝寝過ぎして大失敗をして「恥」の意味を知り、ボスに叱られながら技術を磨く。こうした体験は人間と人間がぶつかるけれど、それを見守る指導者のいる教育の場でこそ培われるものです。失敗してこそ身に付くことの方が人生には多いのではないのでしょうか？ 大人が先回りしてカバーし、体験させないまま成人させた結

果起きる事件の数々を、私たちがよく知っているはずです。

百年前のイギリスの苦悩が頭をよぎります。大人が目先の利便性を追いかけて用意したシステムによって、次世代を担う子どもたちが、幸福な人生をするりと手から逃すことにならないか。楽な方法で次々用意してくれる大人に対して、子どもは本当に感謝しているのでしょうか？ また、子どもよ、レポートぐらい自分で書きなさい！

## 岐阜高校に 思う

森 真

昭和34年卒



光陰矢の如し、昭和34年に

岐阜を卒業してから、もう半世紀近く経ちます。

三年間の岐高生活は茫洋として、はるか彼方にあります。しかし、不思議なことに今まで、岐高の三年間は私のさまざまな思いの根底にあるようです。時に触れなせかその頃の全体や断片が、ふと頭をかすめます。その意味で確かに今日の私の精神基盤の一部をつくっているようです。

同級生とは、今日も交際が続いています。長い私の県議会議員生活、そしてもう十年になる各務原市長職は、同窓生の皆さんの支えもあって続けてこられた感があります。感謝の気持ちでいっぱいです。

最初の岐阜県議会議員選挙の時、年配のご婦人の幾人から「私は岐高女出身です。あなたは後輩。がんばってください」と声をかけられ、本当にうれしく思いました。選挙事務所でも、同窓生の顔を見ると、なぜかほっとする気持ちになりました。

また、三十代で岐阜県議会に初登庁の際は、当時の上松

知事や教育長、部長職の幾人かが岐中出身ということ、ずいぶんと親しみをいただいたものです。

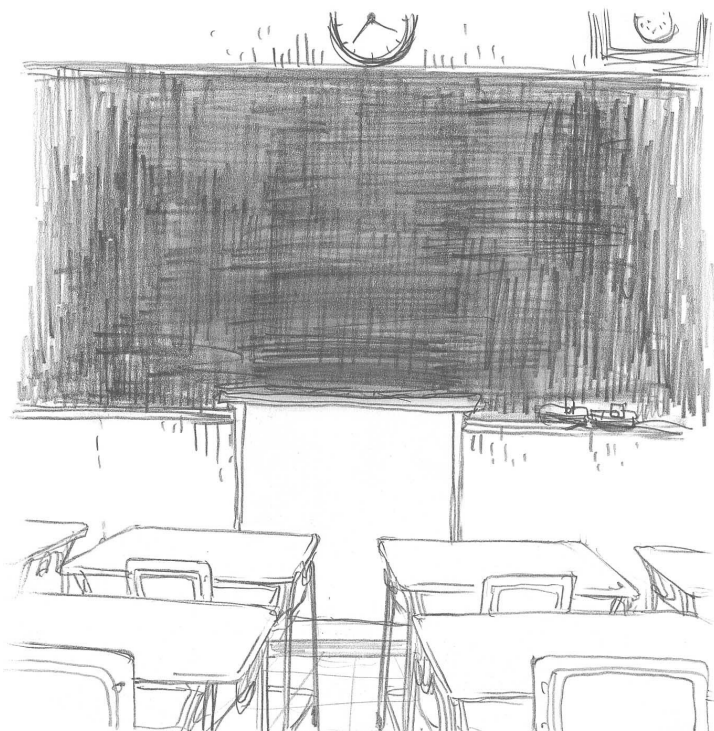
岐高は、歴史と伝統の裏付けがある高等学校です。日本で最も古い高等学校（旧制中学）の一つです。この歴史と伝統は何にも代えがたい価値があります。どんなに校舎が新しくなってもです。それが今日なお岐阜県立岐阜高等学校

校という風格をつくっていきま

す。

高校生活は人が少年期から青年期へ移行する、最も多感な時期です。長い人生の先行きを考え、人が初めて思索し悩める時期でもあります。

人生にとって、この大切な時期に、岐高で高校生活を送ったことを、私は今なお誇りに思っています。





# わが人生

—それぞれの選択—

## 岐高時代…そして近況

伊藤 寿浩

昭和59年卒

とうとう原稿を送ってきていないのはお前一人だという連絡が来てしまった。確か昨年12月の初旬ごろまでにというような依頼だったので、2月の中旬ともなれば無理もない。幹事のM・T君には昨年暮れにも芝刈り等で大分世話になったのに迷惑をかけてしまい、大変申し訳ないことであるが、そもそも人選を間違えた責任は彼にもある。

昨秋に、いつも帰省すると三次会のあとの味噌煮込みうどんまでつきあってくれるR・T君から、「M・Tから近いうちに連絡があると思うけど、同窓会会報の執筆者の一人にお前を推薦しておいた。よろしく。でもいやなら断ってもいいよ」というような電話があった。何だか微妙な話で、(原稿数合わせのため)



めに)「どうしても書いてくれ」というようなことでも無さそうだが、とにかくM・T君からの連絡を待つことにした。数日後、M・T君から依頼メールが届いたのだが、「やっぱり勘弁してもらおう」と思うのに一秒とかならなかった。確かに、傍目には立派な中年なので、わが子くらいの小学校低学年の子たち相手なら、それなりに脚色して「わが人生」を語ってしま

はメールの文章が稚拙なせい、M・T君とメールを何通かやりとりするうちに、不覚にも「わかった。じゃあ書くとよ」ということになってしまった。

ところで、私に執筆依頼が来てしまった理由を推察するに、私が大学といういかにも時間に余裕がありそうなどころに勤めているせいであると思われる。しかし、一般的に言って、時間がある人ほど仕事は遅く、締切にルーズなのである。また、イメージだけで言えば、大学の教員はいかにも文章を書くのが得意そうだというのも、もう一つの理由かもしれない。確かに、私の周りにも上手な先生方は一杯いらっしゃるが、私は工学系の所属で、基本的には書く文章は味気のない専門用語を繋ぎ合わせたものが多く、少しくだけた解説記事のようなものを書く場合でも控えめなおやじギャグを清水の舞台から飛び降りる覚悟でしる程度である。

M・T君に、「わが人生」

何を書けばいいのかときいたところ、正確には忘れてしまったが、岐高時代の思い出、大学時代、就職、家族、近況のような感じでどうだということだった。十分に言い訳はさせていたので、後は彼のサジェッションに従ってお茶を濁すことにしよう。

(1) 岐高時代の思い出…R・T君によれば、私は先生方に随分と生意気な口をきく傲慢な生徒だったらしいが、正直覚えていない。大変申し訳ないことである。

(2) 大学時代…まだ卒業してないようなものだが、博士課程時代は、自分はまだ修行僧のような感じだと思いつつながら日々手足をばたつかせていた。この頃から夜の酒が止められなくなってしまう。

(3) 就職…(運良く?)そのまま残していただいた

で、就職したという感覚がない。教員と言っても、いつまでたっても講義が苦手である。私の講義では、なぜか学生たちの姿勢が悪く、皆顔を机にくっつけている。

(4) 家族…おかげさまで、縁に恵まれ…。

(5) 近況…白髪が増えて、幅だけは良くなり、嫌がる学生をつかまえては偉そうなることをくどくど言うようになった。ちなみに、一回り程度上の方とお酒を一緒にしても、必ずと言っていいほど店員さんは支払伝票を私の方に持ってくるし、また二次会のお店の方とのたわいの無い会話でも、(相手は見た目よりも若く言っているのに)いつも五歳以上上の年齢を言われる。その二次会のお店では、一緒の人が私を〇〇先生と蔑称で呼ぶものだから、「何の先生なの？」ということになるが、実は私はこの質問が嫌いである。

数学の先生や文学の先生と

いうのではなく、「工学」の先生というのは多くのの人にとってピンと来ないらしく、だいたいにおいて、「えっ、法学の先生なの？」と聞き返される。

「いやいや法学では無く、工学、エンジニアリング、まあ小さい機械に関する学問かな」とか何とか説明してはみるものの、「難しいうね(=聞かなきゃ良かった)」とつれない反応をされる。そう言えば暮れの前同窓会で二十年ぶりくらいに会ったE・G君は、私よりもさらに上の年齢に見積もられていた。これからはE・G君のような人と二次会へ行った方が良さそうである。今回、三十年後にもう一度チャンスをお願いとして、まともな「わが人生」は書けそうにならなことを改めて自覚した。R・T君、せっかく推薦いただいたのに大変申し訳ないことをした。

## 30歳からのスローライフ

三輪 隆

(本名・篠田隆司)  
昭和49年卒

二十代のはじめの頃、友人の女占い師(若いけれど占いはよくあたった)から「あなたは四十歳で大病をして命を落とすかも」と宣告され、そんな短い人生ならそれまでに自分の好きなこと、やりたいことを全部やっておこうと、

いたって気ままに生きてきました。幸か不幸かその占いははずれて五十歳まで生きのびてしまったため、今になっていささか焦っているが(四十歳のときマラリアにかかって九死に一生を得たので、占いは半分ぐらいあたったのかも知れない)。

私は今、東南アジアのタイという国の北の果て、ミャンマー、ラオスとの国境地帯にあるチェンライという田舎町に住んでいる。

二十代は東京でフリーの雑

誌の記者をやっていた。三十歳になって初めてアジアを旅したとき、タイ北部の山岳民族の子供たちと出会った。貧しさにもかかわらず、山岳民族の子どもたちの笑顔は、まるで現代の奇跡のごとく神聖な輝きに満ちていた。私は彼らのスローだが地に足のついた生活と文化に魅せられ、その後数年間かけて、電気も水道もないタイの山々の村を泊まり歩きながら、写真を撮り続けた。

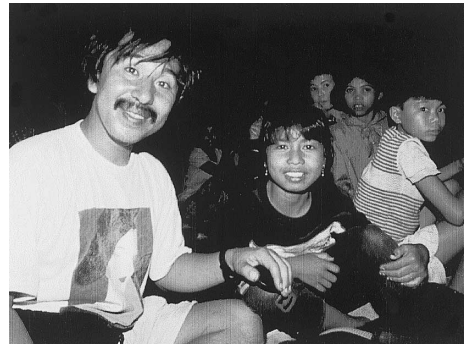
そんなある日、チェンライの安宿で寝転んでいた私のところに、誰から聞きつけたのか、背筋のしゃんとしたスーツ姿の白髪の日本人が訪ねてきた。品のよさそうなその老人は、東京の有楽町にオフィスのある某会社の社長さんだという。

老人は自分の身の上話を語り始めた。

「私は第二次世界大戦の末期、あのインパール作戦で日本軍に従軍していましたが、白骨街道とまでいわれたようなあの過酷な戦地からなんと

か生きのびて帰ってこられたのは、ビルマ(現在のミャンマー)のジャングルで右往左往していたとき、山岳地帯に住んでいた人々の助けとホスピタリティーがあったからです。今、私はその山岳民族の人々に恩返しをしたいのです。私は老人で、もう体力は残ってはいませんが、あなたはまだ若い(当時私は三十五歳)し、いろいろな山岳民族の言葉ができるともお聞きしました。私の代わりに山の人たちを助ける力になってくれませんか。多少のお金だったら出します」

それは私が愛読したアメリカの作家、ジャック・ケルナーの自伝的小説『路上』の中で、放浪生活の途上である日街角に白髪の老人が現れて「他人のために嘆くようなれ」と言い残して去っていくという一説を髣髴させるような体験だった。このN氏との出会いが、私が山岳民族の子供たちの教育支援NGO「さくらプロジェクト」を立ち上げるきっかけになった。



頃になった少女たちの中には現金を稼いで親に貢ぐために売春宿で働かされたり、麻薬の売買に手を染めて逮捕される者もいる。エイズが蔓延し、絆の強かった共同体は貨幣経済の流入に伴って揺らぎ、伝統的な文化も廃れ、村は荒廃しはじめている。

ラオス、ミャンマーと国境を接するタイ北部の山岳地帯にはラフ族、アカ族、リス族、モン族、ヤオ族、カレン族などビルマ・チベット系の言語を話す山岳民族が暮らしている。それぞれ独自の文化、言語、民族衣装を持ち、日本人と似た顔つきをした、温和でホスピタリティー豊かな人々だ。

彼らはごく最近まで伝統的な移動型の焼畑農業によって生計をたててきたが、政府の森林保護政策により耕作地が制限され、生活は極度に窮している。辺境の地なので学校もなく、子供たちには義務教育を受ける機会さえない。年

給だった。マラリアに二度、 Deng 熱に一度かかって命を落としそうになり、電気のない村で夜中に民家のバルコニーから階下に真逆さまに落ちて内臓破裂で入院したこともあった。追いはぎにも会った。

それでも素直で心やさしい子供たちと一緒に暮らすのはとても幸せで、充実した毎日だった。タイ語はもとより五つの民族の言葉を話せるようになり（これは岐高時代に英語でしぼられたことが役に立っているかもしれない）、プロジェクトのことは広く知られるようになり、日本の皆さんからも多くの温かい支援を受けるようになった。

私の収入はいまだに二十代の頃よりも少ない。同じ年代の人々に比べれば、私の人生はトラックの長距離離走に例えれば、周回遅れどころか二周、三周遅れ、いやもう競技場を飛び出してあらぬところを迷走しているような状態だ。最近の品のない流行語でいえば「負け組」、しかも

「超負け組」である。

しかし、人間が勝ち負けを口にできるのは若いうちだけであろうと私は思っている。中年の声を聞けば、老、病、死という誰にも避けられない宿命や身内の突然の不幸などが次々と待ち構えていて、昨日まで勝ち組だと思っていた人が、いきなり不幸の落とし穴にはまることだってある。やがて年をとればみな、勝ち負けという価値観のバニシング・ポイントを迎えて、最後は皆がイーブンになる。それがこの世の理（ことわり）である。

人生の前・中盤はいかにしてお金を稼ぐかに心血を注ぐのもよいかもしれないが、人生の終盤は、そうして貯めたお金を何のためにどのように使うかが重要になってくる。お金の使い方は貯め方以上にその人の人生が問われるというものだ。四十代まではこの世と向き合っていればよいが、五十を過ぎたらあの世とも向き合わなければならぬ。それが私の人生観である。

そういう意味では、せめて少しは功徳を積んでから死ぬのも悪くない。どうですか、皆さん。と、何だか最後は新興宗教の勧誘のようになってしまったが、PRを少々。

さくらプロジェクトの奨学金システムは、誰でもいつでも参加できる。年間六万円（高校以上は十二万円）の「里親基金」を卒業まで継続（三〇九年）して支援していただくことで、一人の子どもの人生を救い、未来を開くことができ。皆さまのご支援、ご協力をお待ちしています。さくらプロジェクトのホームページアドレスは

<http://chmai.loxinfo.co.th/sakura/>

問い合わせはさくらプロジェクト事務局 ○四五―八六四―五五五二（久富方）

メールアドレス sakura-project@yahoo.co.jp または [pisakura@hotmail.com](mailto:pisakura@hotmail.com) まで

# お・か・げ

梶 俊 之  
昭和39年卒



自分が今あるのは、いろんな人の「おかげ」と心から思えるようになったのは、つい最近のことである。

私は1946年3月25日、中華民国青島（チンタオ）市に生まれた。この年は戦争に負けた翌年である。自分たちも生きて日本へ帰れるかどうかも怪しい状況の中で、母は私をお腹の中でよく守って育ててくれた。私の両親は私が生まれてから連れて帰ろうと決心したのだ。いろんな苦労



が沢山あったに違いない。母も九五歳になり記憶は曖昧になっているので、残念であるが正確なところは分からない。母が病院へ行くときは中国人が付き添ってくれた。日本人だと分かるとひどい目に

会う可能性があるからである。父に中国人の友人が多かったお陰で母とお腹にいた私は救われた。また帰国船の苦勞話もよく聞かされた。とにかくいつ乗れるか分からないので父が毎日港で並んでいたという。ようやく船に乗れたのは私が生まれて三週間後のことである。船上では、目を離しているとき盗まれるので、乾くまで父が私のオムツの番をしたという。

私の命は日本人である父

母、父の友人の中国人たちのお陰で守られたのだ。そして、生まれて三週間目で船に乗り、飛騨まで引き揚げてきた。

小さい頃は飛騨の山あいの田舎で育ち、小学校に上がったのは富山県のこれまた田舎である。田んぼに囲まれた村であった。同じ田舎でも、飛騨と富山（私の住んだ）は違っていた。例えば、川でよく魚取りをしたが、飛騨では鮎とかハエ、うなぎもいた。アジメ、鱈もいた。富山ではフナ、鱈、鯰が多かった。富山では川に入ると足が泥の中に沈んでいった。飛騨では水が透きとおり水底の岩がきれいだった。そんな多様な素晴らしい自然の中で遊んだ。それは私の今の感性に大きな影響を及ぼしている。この遊びの場が今の子どもにはない。全く同じものは取り返せないが、代わるものは必要だ。

最近いじめとか不登校問題で転校がきっかけになったというをよく聞かすが、私の場合は、引っ越しと転校のお

かげで友達作りが得意になった。富山の小学校から三年生の夏岐草の白山小学校へ転校した。五年生に進級するとき華陽小学校へ転校した。その三つめの小学校を卒業した

が、実はすでに卒業の前に徹明校下に引っ越ししていたので、中学校はまた新しく友達作りをした。今の子どもたちと私たちの世代と根本的に違うのは、人との関わり、その幅と多様性である。私たちが育ってきた周囲には年齢もさまざまな人が一杯いたし、いろんな職業の人がいた。お金持ちもいたし、自分のように貧しい家庭も沢山あった。そしていろんな人の結びつきがあった。そんな中で、大人も子どもも皆、異質なものを受け入れる能力、こころの余裕を持っていた。

私が中学生から高校生の頃、父は病気がちであった。母が古本の露天商をしていた。これを私はずっと手伝っていた。高校生の時、よく授業が終わると自転車で急いで家に帰り、母が店を出すの

を手伝った。古本を並べ終えるとまた学校に戻り部活をやったり、生徒会活動をやったりした。部活は卓球部、新聞部。演劇部にもよく顔を出したので、部員でもないのに公演のときの写真に演劇部員と一緒に写っている。二年生のとき会長に立候補し、一緒に仕事をしてくれる人を求めて走り回ったことが懐かしい。

フォークダンスを生徒会主催で初めて実施した。先生方にもお願いに回ったことも今となっては良い思い出である。生意気な高校生であったが、先生方は真剣に聞いてくださり、話（と言うより、議論）相手になって下さった。今になって感謝している。いい先輩も沢山いた。一年上のある先輩によく付いて歩いた。何を話したかは全然覚えていないが、いろんな点で大きな影響を受けた。その先輩は自分が中学生の時から読んで本の目録を作成して持っていた。それを見たときの驚きは大きかった。その先輩の文字が並んだページを鮮明に覚えてい

る。カルチャーショックである。それからよく本を読むようになった。今の私の中に、高校時代の先生、先輩、友人から受けた「お陰」を感じている。

(屋久島おおぞら高等学校勤務)



早いもので既に還暦を過ぎてしまいました。昔ならおじいさんで、とくに引退しているところでは。現在はまだ体に大きな不具合がないため、サラリーマンを勤めています。

そして時々、聞かれます。『どうして、そんなに五ヶ国語も七ヶ国語も外国語が話せるの?』

私は旅が好きなのです。から、来年はもう勤めをやめて、旅に出ようと考えております。

思い返せば、高校を出て、

大学へ行ってからというものずっと旅をしてきた感じがします。

もう早くに亡くなってしまった、ポン太(豊田嘉彦君)達と Dance Party で儲けた金で旅した『雪国』は川端康成の世界がまだ残っていました。

大学院では原書ばかり、それも二、三ヶ国語。私の能力ではとてもついていきませんでした。入学させるほうもい加減でした。ね。(今では難関といわれる慶応なんですけどね)

今で言う語学留学のはしりですが、これまたいとも容易く教授はケルン、ケンブリッジ、サラゴッサ大学と超有名大学に推薦状を書いてくれました。おかげで約三年、西欧州のいたるところを旅することができました。(親のすねかじりでした、\$111136)

外に出ること、人と接することを億劫だと思っただけではないせいでしょか?



て生まれた軽佻浮薄な性格なのでしょか?

それとも、両親が付けてくれた名前のせいでしょうか?  
「すぎやま のりしげ」を「すぎやま のりすぎ」と読んでくれる人がたくさんいます(全部当たっていることですよ)。

おかげで、日本ばかりでなく、多くの土地、国々を旅することができました。ただ大学院には戻ったものの、また旅に出たくなり、外国へ行く会社に入れてもらうことにしました。

欧州滞在経験のおかげで、ある会社が採用してくれまし

た。(川崎重工なんですけどね、一応優良会社ということで中途採用なんて考えられない時代でしたが、運が良かったのでしょか、よく採用してく

れたと感謝しています) 会社では、明石、英国、ドイツ、フランス、イタリア、オランダなど西欧州に駐在、出張を命ぜられ、次は北

米、南米とアルゼンチンのパンプス、チリの果て、南極に近いくところまで行かされました。(何をやっていたかって? Kawasaki のオートバイを売り歩いていたのです)

それが一段落すると、会社は岐阜に異動を命じました。ここでも海外要員、再度欧

州、北米、新たに韓国、中国、東南アジアと飛び回っていました。航空機の仕事のため辛いことは一件を除き全くありませんでした。

その一件はサウジアラビア、五年ほどの駐在でした。(ここでの話は、本一冊になりますので省略。一言で言えばアラビア語だけは覚える気がしませんでした。) タイヘンな国でした。

ここまでで、文頭の私に対する質問への答えになっているのではと思います。さて、私の最後の旅は、南米のマチュピチュを目指します。私の大好きなスペイン語です。一年ぐらいあの辺りを探索したいですね。一緒にいきたいと思われの方はどうぞ。

岐阜に生を受け、世界を廻ってまた岐阜に戻って来たのです。安んじて一緒に歩きますよ。では、Hasta la vista! (お会いできる日を楽しみに)

# 夢の実現

野口常夫

昭和39年卒



僕は、この手記を東南アジアの西端の地、ミャンマーで書いている。かつてビルマと呼ばれ、第二次世界大戦中二十万人以上の日本の将兵が戦った地でもある。

僕はミャンマーで自分の夢をかなえるために、毎年六回、一回平均十日の割合で滞在し、すでに五年が経った。それは「航空工学専門の工科大学を作る」夢である。

さて、話を四十五年以上前にさかのぼって話を始めよう。

僕は現在の美濃加茂市太田

町に生まれ、美濃太田中学校（現在は統合され廃校となっている）に通っていた。

この頃の町の南側には、各務原の飛行場に着陸進入する飛行コースがあり、米軍や自衛隊の飛行機がよく飛び交っていた。家に帰ると町を流れる小川の土手に寝転んで飛行機を見るのが楽しかった。家では勉強、勉強とそれ以外に言葉を知らないのかと思う親の目を盗んで、毎日模型飛行機ばかり作っていた。いか自分で作った飛行機を操縦して太田の町の上空を飛んでやる、そんな大それた夢を見るようになっていた。

中学の図書館で、日本大学理工学部の故木村秀政先生の研究室で、学生が設計した二人乗りの軽飛行機が飛行した記事を読んだ。まさに衝撃だった。この記事が僕の一生を大きく変えるとは、またこの時の木村先生が私の公私共に恩師となり、先生が亡くなられるその日まで御一緒するのは、そのときは感じるすべもなかった。この時、僕は日本

大学理工学部に行って木村先生の下で飛行機の勉強をする事が目標となった。

憧れの大学に入ってから航空工学の勉強は想像していた以上に大変だったが、好きな飛行機に関する勉強なので毎日が充実して楽しかった。なんとか木村研究室に入る事が出来た。卒業研究は、木村研究室と航空機の整備会社との共同開発で生産された四人乗りの飛行機N-62「シグネット」の量産型機の性能改善研究を行った。この頃、同じ木村研究室では人力飛行機の研究も行っており、この研究も掛け持ちで行っていた。

卒業が近づいた頃、木村先生から、新しい飛行機の開発を行うから、学校に残って手伝ってはと声をかけられた。まさに子供の頃から夢に見た飛行機が作れるチャンスである。当時アメリカ留学が決まっていたが、これをキャンセルして研究室に残った。計画はスタートし、機体は二年間で完成した。機体の名前はN-70「シグナス」。

飛行テストは事業用操縦士のライセンスを取ったばかりの僕が行うことになった。子供の頃から見続けてきた夢が叶う瞬間だった。この機体は、研究室で飛行実験機として研究に使用され、十年以上も飛び続け、現在「かかみがはら航空宇宙科学館」に展示してある。

僕は、五十歳になった年に大学を退職した。目的は航空工学専門の工科大学を作ることだ。

米国、欧州の航空機の研究とその発展を目の当たりにし、その実力を見せ付けられると、どうしても米国、欧州



に近い教育環境を持つ航空工学専門の工科大学が必要だと痛感した。それには理想の航空工学専門の工科大学を作る事だと在職中に心に決めていた。

退職はしたが、まさにゼロからの出発だった。以前から知り合いの航空教育専門の学園の理事長から航空工科大学建設計画の話があり、この学園の航空研究所に就職して計画を進めていた。この時、学園の格納庫にN-62「シグネット」の量産一号機が、二度と飛ぶことのない整備訓練用の教材として使用されているのを知った。僕が大学の卒業研究のテーマにしたのはこの飛行機で、日本大学にも試作一号機があり、僕はこの機体で研究目的での飛行実験と、学生の操縦指導で三〇〇時間近く飛んだ経験がある。懐かしい機体である。何とかこの機体を再び飛ばそうにしよう一度操縦してみたいと思った。

ちょうどそのとき偶然にも「かかみがはら航空宇宙科学

館」から、この機体を展示したいとの話があった。それならば飛行可能な状態に復元して各務原飛行場まで飛行し、そして展示してはと提案したところ、科学館側から全面的な協力が得られ、復元作業が始まった。二年をかけて飛行可能な状態に復元が完了し、僕の操縦で各務原飛行場に向かった。着陸進入コースに、太田町の南の上空を通るコースをリクエストした。子供の頃、このコースを飛行する飛行機を何度も目に焼きつくほど眺めていた。いつかはこのコースを飛んで、空から自分の町を見てやろうと思っていた。まさにこの願いがかなった。空から見る太田町は大きく変わっていた。子供の頃、飛行機を見ていた小川を探した。前方を見ると、かすかに各務原の滑走路が目に入ってきた。この機体も現在「かかみがはら航空科学館」に展示されている。

この学園での航空大学建設計画は途中で中止となり、学園を退職した。和歌山県が航空工科大学建設計画に興味を持っており、僕も実現に奔走した。三年の検討期間を経て計画が県議会で議決され、県事業として正式に実行に移されたが、新知事の事業凍結と行政判断で中断され、事実上中止となった。すかさずこの計画を、興味を持ちそうな県に提案、何名かの知事にお会いして説明したが、話は進展しなかった。すでに二年が

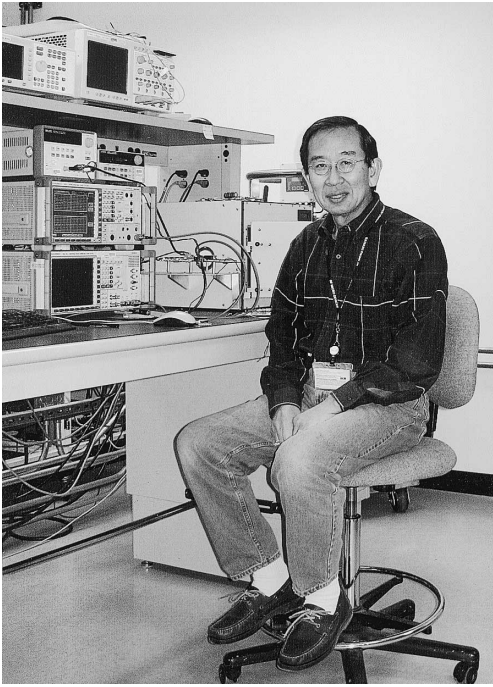


経っていた。夢、希望、挫折、失望、夢、希望そんな言葉が繰り返される八年間だった。ちょうどこんな時、キャンマーから国立航空宇宙技術大の学建設の協力の要請の話が、僕のところにあった。多少の迷いは在ったが、夢と希望を持ってこの計画に飛び込んだ。昨年、大学開校から四年目を迎え、この間、いろいろ

の問題は在ったが、大学は順調に育っている。まだまだ大学でなければならぬ仕事は山ほど在る。もっと時間がほしい。まだ道半ばの僕の拙い経験の中で学べた事は「決して諦めない」であり、無限の可能性のある若い岐高在校の皆さんに送る、一先輩からの励ましの言葉と聞いていただきたい。



岐阜高校を卒業してはや四十年以上。昨日の事のようにです。高校時代は宿題もそこそこで、専らテニスで毎日明け暮れました。印象に残っているのは三年生の終わり近く、社会の授業中に千村先生が出された質問「将来何をやりたいか」に対し、自分も含めて多くの者が、良い学校に入り、良い会社に入るといっような当たり障りのない、あまり深く考えたことのない将来感だったこと、その中で宮田君だけが、いろいろ考えたい事があり来年進学しないという、非常に哲学的な考えを披露し、何か自分が恥ずかしく思ったことです。大学は一期校を二年続けて落ち、結局長野の信州大へ行きました。スキーをしたいという単純な理由でした。入った当時は漠然と、レコードの録音エンジニアにと考えていたのですが、一向にモチベーションが沸かず、余り勉強しませんでした。自慢になりませんが、この学校には自分と同様に一期校に落ちた県外の連中が少なからずいて、科が違う連中とも仲良くなり、いまでも交際が続いています。大学一年の時、親父が癌で亡くなりました。そのころ、カナダから伯父夫婦が来日していて、カナダでの生活、仕事の話が出て、ではあちらで仕事をしようかと思いい立ちました。日本では一期校と二期



校の違いで就職に差がつくようだったので、実力次第というカナダへ目を向けたのです。大して実力があつたわけではないのですが。

1970年、カナダでレコーディング・エンジニアになり、夢を抱いて渡ったのですが、夢と現実には大きな違いがありました。僕が住む事になったバンクーバーには、これといった電子関係の会社が無く、そんな会社は皆、東部でした。仕事そのものも矢鱈とある訳ではなく、あつても経験無しで採用されるのは皆無でした。今でもカナダ、アメリカでは経験が大きく物を

言います。新卒も仕事を見つけるのですが、こちらの学生は夏休みにインターンとして会社に入り、経験を積む事が少なからずあります。

職をいろいろ探し、やっとケーブルテレビの機器を作る会社に、言ってみれば工員として雇われ、調整、テスト等の仕事をエンジニアの人たち（西ドイツが多かった）と一緒にやりました。

ところが、新しい移民という事だったためか、他の従業員の給料が上がっても僕のは上がらなかった。腹が立って辞めようかと思つたのですが、他に仕事が多く有る訳で

もなく、黙って続けました。この辺りがやはり日本人ですね。こちらの人ならすぐ苦情を訴えたと思います。一年半後に新しい仕事が見つかり、辞表をすぐに書きました。工場長が慌てて、給料をすぐ上げると言いましたが、何を言っているんだーです。

次の会社（従業員八、九人）では技術屋らしい仕事、無線関係の設計を始めました。この会社は入って三カ月後に昇給、六カ月後にまた昇給でした。雲泥の差です。十二年勤め、会社も従業員百二十人と大きく成長したのですが、その頃のひどいインフレで経営が傾き、カルガリにあったノヴァテルというカナダで唯一、セルラ電話を設計・製造する会社に移り、本格的な、そして大規模会社経営というものゝを初めて目にしました。コンピューターを用いた設計・解析も習いました。

仕事は順調でしたが、住み慣れたバンクーバーが恋しく、誘いがある、その頃始まったばかりの無線によるデ

ータ伝送のシステムおよび機器を設計・製造する会社に移りました。その頃から仕事の関係で日本へ出張する機会が多くなりました。不思議だったのは、日本の社員は上司が残ると皆が、仕事も無いのに残業していた事です。随分、不能率に感じました。

結局、このカナダの会社は、競争会社であるモトローラに買い取られ、僕もモトローラの一員となりました。やはりモトローラは大きいですね。北米にあるあちこちの設計所の技師と話をする機会が増え、大いに勉強になりました。上には上がいます。しかしこの事業部も業績がはかばかしくなく、リストラでシアトルの設計所に移りました。

その後四年ほど、携帯電話の開発に加わり、2001年北米でのバブルの崩壊に伴い失業です。以降、エレクトロニクス、インテル、そして現在のRFマイクロと転々です。利益が上がらなければすぐ縮小というのが現実です。多分、今の会社が最後の仕事と

なると思います。

これだけレイオフがあると、以前のように必死になって仕事をするという気分が出てきません。引退時期が近づいてきたからでしょうか。

二、三年後には、カナダで始めたサーモン釣りを基にガイドでもやりたいなと夢を見ています。退職後は今住んでいるアリゾナからカナダのバンクーバー島に引越す予定です。

卒業して四十二年、北米生活三十六年。いろいろな人と邂逅し、僕の人生の針路も時々変わりましたが、悔いはないですね。多分、日本では経験できそうな事をこしらえてきたと思います。

僕を支えてくれた事の一つは「最後まで諦めるな」です。今でもよく憶えています。一年生のとき、テニスで僕と井口君が組んで新人戦に出て、セット・ポイントを取られながら挽回し、その試合を勝ち、ついには優勝してしまつたことを。



# あのころ

## ～思い出のページ～

### 宝物の思い出

川本 美奈子

(旧姓・青木)  
平成3年卒



先生の向かって右が私

岐阜高校を卒業してはや十数年が経とうとしています。しかし、卒業したのがつい最近のように感じるくらい、いまだに何かとっては連絡を取り合っている友人がたくさんいます。お互いの近況報告も電話やメールを通じて常に入ってきます。そんな付き合いができる友人達に出会えた岐阜高校で過ごした三年間

は、私の人生において宝物になる思い出がいっぱい詰まっています。

特に思い出深いのは高校三年生の一年間です。堀有吾先生(大きな声でコーラーと叫ぶのが特徴です。私はよく授業中にあくびをして怒られました)を中心に、受験も迫っているというのに夏はクラスのみんで金華山に登って花火を見たり、文化祭だといっては学校中を巻き込んでダンスパーティーを企画したり、センター試験の終わった後にはみんなで打ち上げをしたり、卒業旅行と称してバスを借り切って富士山の麓の温泉に旅行に行ったりと、何かと理由をつけては楽しみを作って、みんなで盛り上がっていました。受験のつらさは思い出さないのですが、楽しかった事は昨日のことのように思い出すのが不思議です。

高校を卒業してからみんなバラバラの大学に入学したにも関わらず、年に数回は集まっています。いまでも、年一回の花火大会には長良川の

河川敷に朝からビニールシートを敷いて場所取りをしてくれる友人がいます。

別々の職業になったり、家庭を持つたりしているにも関わらず、集まると高校時代と変わらない調子で話が弾んでいきます。そんな友人達を、これからもずっと大切にしていきたいと思っています。

### あの頃を 顧みて

長谷川 公

(旧姓・安藤)  
昭和59年卒



弟夫婦の同居に際して自室の整理をするよう実家から連絡が来ました。家を出て以来そのままになっている本棚には、懐かしい教科書、参考書の類が並んでいました。数学

チャート、赤尾の親単、豆単など手にとると、中には○印×印や線が書かれており、紙の柔らかさと手垢からも使い込んでいた様子が偲ばれます。一気に高校一年生にタイムトリップしてしまいました。

当時、岐阜に行く、イコー、街に行く、ことであり特別なことであった郡部の小さな中学出身の私は、これから毎日、都会(当時はそう思っていました)の知り合いもない大きな学校に通うことに大きな期待と不安を持っていました。それゆえ、一年生の頃の記憶が一番鮮やかに甦ります。鞆の厚みは何センチ、スカート丈はどのくらいということまできちんと守って入学してみると、岐阜市出身の子達はそんなことはお構いなし(が多かった)なのに驚きました。テストの帰りにクラスメイトに連れられ、ドーナツショップに入ったり、柳ヶ瀬でファンシー雑貨を買ったりすることが、岐阜の子には普通でも私にはとても新鮮に感じたものです。

一年二組の担任は英語の太田先生で、岐阜出身であるゆえ後輩である我々岐阜生に対する思いも熱いものがありました（それ以上ドラゴンズへの思いも熱かったのですが）。単語のテストが毎日あるのに、は参りましたが、田舎出身の真面目さから一生懸命覚えました。しかし、落第して出席簿で頭をたたかれ単語を何回か書いたほうが楽ではないかという誤った考え方に傾いて

から英語の成績は下降の一途をたどってしまい、三年生になって慌てて英単語を覚えなおす羽目になりました。田舎では割と成績がよかった私ですが、どうってことない顔でいつも単語満点のクラスメイト、チャートの解法さえ理解に苦しむことがあったのに、大穴レベルの解法を考え出すクラスメイト、古典では韻を踏んでの自作の歌がすらすらと出てくるクラスメイトなど、

世の中には本当に頭のいい人がいるのだと思知らされました。友人の読書熱から、三浦綾子にはまり氷点から一気にシリーズを読破したのも、さだまさしやチャゲ&飛鳥など歌謡曲とは少し違う大人っぽい歌を教えてもらったのもこの頃でした。休み時間に各々お気に入りの憧れの先輩（今では名前も忘れてしまいました）をききゃあきゃあ言いながら見に行ったのも懐かし

い思い出です。

現在は名古屋で眼科医をしております。大学が地元でしたので岐阜高校の同窓生は多くいますが、卒業してからは高校のつながりとも疎遠になってしまいました。今回の寄稿に際し、大学への所用がてら、西野町を通過しました。岐阜高校の生徒の姿に二十年以上も昔の自分を重ねきゅんとしてしまいました。忠節橋から西に見える校舎、東の金華山、変わることもない懐かしい光景です。

## 昭和58年度

### 岐阜高校

創立一二〇年

### 国内外の主なニュース

NHK・朝のテレビ小説「おしん」放送開始（4月4日）  
東京ディズニーランド開園（4月15日）  
日本海中部地震。M7.7（5月26日）  
第13回参議院議員選挙。比例代表制導入（6月26日）  
ファミコン発売（7月15日）

免田事件の再審裁判で無罪判決（7月15日）  
大韓航空機墜落事件。ソ連戦闘機がニューヨーク発、ソウル行きジャンボ機をミサイル攻撃。乗員、乗客全員死亡（9月1日）  
ラングーン事件。韓国大統領らが訪問中の暗殺事件（10月9日）  
三宅島の雄山が大噴火（10月3日）  
田中角栄元首相に東京地裁が実刑判決（10月12日）  
絵入り年賀はがきの地方版発

行（11月4日）  
第37回衆議院議員選挙。自民党が過半数割れ（12月18日）  
三井三池鉱業所の有明鉱で火災、83人死亡（59年1月18日）  
家永三郎中央大学教授が教科書検定は違憲だと東京地裁に訴える（59年1月19日）  
植村直己さんがマッキンリー冬季単独登頂に成功後、消息を絶つ（59年2月12日）  
江崎グリコ社長の誘拐事件発生。3日後に自力脱出（59年3月18日）

## 恩師

### 小島洋先生

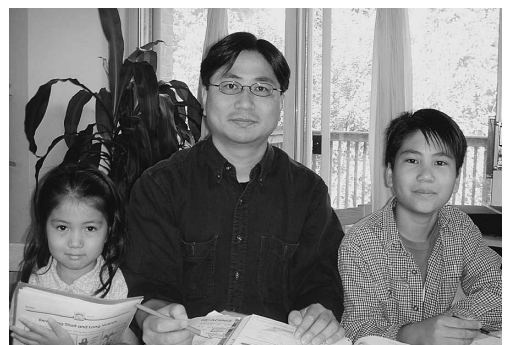
八木尚也

昭和59年卒

岐阜に入学して最初の学級会で議論が紛糾。その時、担任の小島洋先生は我々の話し合いに一切口を挟まれませんでしたが、小島先生がご自身で意見をおっしゃり、会議を誘導されたなら結論は早く出たのかもしれないが、先生は

ぐっとがまんして、我々に全てを任せてくれました。全員で議論を戦わした末に思いがけない解決を見て、その結果、クラスの団結は深まりました。今になり、あの時の小島先生の教育者としての忍耐力が我々の自主性を育ててくれたのだと思ひ至っています。

高校生の時、アメリカの首都ワシントンDCを流れるポトマック川に旅客機が不時着する事故がありました。凍てついた川に浮かんだ飛行機を遠巻きに眺めるだけのアメリカ人を見て、小島先生は「どうしてすぐに飛び込んで助けに行かないんだ」と憤ってお



られました。それは「あの場  
にいればご自身が即座に飛び  
込むような人だからこそその言  
葉だ」と我々に伝わりました。  
私は現在ワシントンDC近郊  
に住んでいます。ポトマッ  
ク川を通る度に、小島先生の  
そういった一言が我々の人格

形成に多大なる影響を与えて  
きたことを感じています。  
浪人後、大学に合格し手続  
きの為一年振りに学校に行っ  
た時、小島先生がとても喜ん  
で下さり、近くの喫茶店に私  
を連れて行って下さいました。  
先生と一緒に喫茶店に入るこ

となど初めてで、なんとなく  
大人になったような気がして  
うれしくて、実は既に昼食を  
済ませていたにも関わらず、  
ご馳走してもらったカツ丼を  
残さず食べたことを覚えてい  
ます。何よりの入学祝でした。  
今回の寄稿にあたり、岐高  
で小島洋先生というすばらし  
い教育者に出会えた幸運に改  
めて感謝しています。

## 昭和58年

安藤 嘉浩

昭和59年卒

「めだかの兄弟」が街角に  
流れ、NHK連続テレビ小説  
「おしん」が日本中を興奮さ  
せていたはずだ。大島渚監督  
の「戦場のメリークリスマス  
」が封切られ、東京ディズ  
ニーランドのオープンも話題  
になっていたと思う。

そんな昭和58年の前半を、  
ぼくらは来る日も来る日もグ  
ラウンドで過ごしていた。岐  
阜高校は創立一一〇周年を迎

え、硬式野球部は創部一〇〇  
周年の節目だった。「記念の  
年に甲子園へ」が周囲の合言  
葉だったけど、正直に言え  
ば、九九年目でも一〇一年目  
でもよかった。三年生、最後  
の夏だ。甲子園という遠い夢  
を追いかける日々が、いつま  
でも終わらないで欲しい。そ  
んな思いでボールを追っかけ  
ていた。

ぼくらの願いは、ちょっと  
だけ叶った。第六十五回全国  
高校野球記念岐阜大会で、岐  
阜高校は快進撃を続けた。  
準々決勝で強豪の大垣日大を  
破ると、準決勝の高山工戦も



中央の賞状を持っているのが私

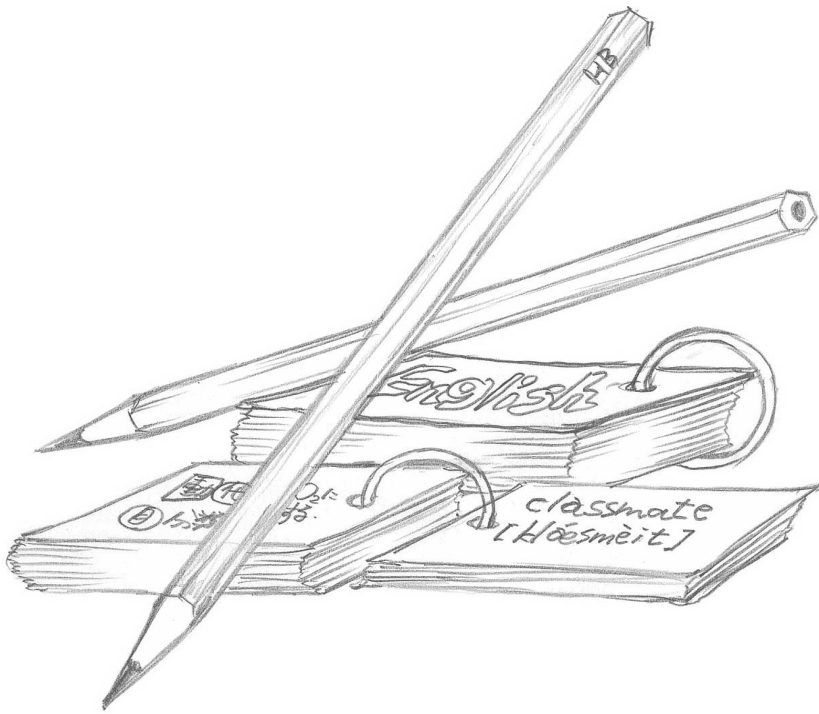
快勝。マスコミは「百年旋  
風」を騒ぎ立てた。

### 昭和58年度

#### 岐阜県内のできごと

サンピア岐阜完成(4月18日)  
安房トンネル調査坑起工式  
(5月28日)  
岐阜市歴史博物館起工式  
(7月15日)  
台風10号で東濃、飛騨を中  
心に大被害。自衛隊出動

(9月28日)  
県人口の200万人突破を  
記念、県庁前にイチイを植  
樹(10月8日)  
徳山ダムの補償交渉が妥結、  
県庁で調印式(11月21日)  
岐阜流通センター完成式  
(11月26日)  
県警にヘリコプター「らい  
ちよう号」配備(59年3月  
3日)



## 昭和58年度

### ことば

「義理チョコ」

「不沈空母」

「軽薄短小」

「おしん・家康・隆の里」

「あたまがウニ」

「少し愛して、長く愛して」

「て」

「いかにも一般大衆が喜び

そうなアイデアですね」

「忘れ得ぬあのとときめきを

旅に生まれませんか ご夫婦で」

### うた

「さざんかの宿」 大川栄

策

「矢切の渡し」 細川たか

し

「お久しぶりね」 小柳ル

ミ子

「釜山港へ帰れ」 渥美二

郎

「ギザギザハートの子守唄」

ニチエツカーズ

「ワインレッドの心」 安

全地帯

スタンドには多くの同級生が応援に駆けつけ、即席のブラスバンドがマーチを演奏してくれた。

ただ、決勝は完敗だった。

優勝候補の岐阜第一に四一八。ぼくの記憶は、この試合だけモヤがかかっている。ブラスバンドの音も聞こえない。ひどく緊張していたのだと思う。それがぼくらの限界だった。

数日後、部員の一人が彼女

と映画に出かけた。封切り直後の「フラッシュダンス」だったと思う。ぼくも数日後、見に行った。「愛と青春の旅立ち」と二本立てで得した気分になった。

二学期が始まった。岩田の

古典も、森トの数学も、太田（みんな敬称略）のリーダーも難しく、相変わらずよく分からなかったけど、そんな思い出のすべてが、ぼくの青春だった。

## あの夏

松井純子

(旧姓・木村)

昭和59年卒

昨春、卒業後二十二年目に参加した同窓会で皆から「野球部マネージャーの木村」と呼ばれました。未だ母校にも野球部にも何のご恩返しも出来ず申し訳なく思っています。が、反省も込めて思い出を綴ります。

今でこそ女子マネは公式戦でベンチ入りするほど一般的になりました。しかし当時はただ野球が好きだから入部させて欲しいと直談判に来た妙な新入生に、顧問の先生方やOB会の皆様は大いに困惑された様でした。後日、入部を認めてくださいましたが、当初は試行錯誤の毎日で部員もさぞ迷惑だったでしょう。でも後に練習の手伝いをさせていただいた私の父のことが怖かったせいも、皆さん戸惑いながらも温かく迎えてくださ

り、本当に感謝しています。毎年、心強い女子マネ仲間も増え、三年時には三人になりました。用具運び、お茶作り、ボール拾い、テープでのボール修理、マシンへのボール入れ、トスバッティング補助、スコア付けなど、いろいろ参加させてもらいました。当時の部員は練習中の水分

補給もままならず、炎天下の練習は本当に大変で、休憩になると用意していた大きなヤカンがあつという間に空っぽになったことを思い出します。三年生（昭和58年）の夏は、学校創立一一〇周年と野球部創部一〇〇周年の節目に当たり、周囲の期待と応援をそれ





部員の皆さん

(先生方、ごめんなさい)来てくれた生徒も多かったと後で聞きました。残念ながら甲子園にはあと一步及びませんでした。試合後、部員から、「マネージャー、お疲れさんでした」「ご苦労さん」と言われた時、終わってしまったんだな…と痛感したのを覚えています。こんな私を暖かく見守ってくださった皆様に感謝しつつ、母校の益々の御発展と、後輩たちの活躍を心よりお祈りして筆を置きます。

## 第34代岐阜高校 校応援団団長

村上 栄 司

昭和59年卒

同窓会会報誌発行にあたり、寄稿の機会を与えていただいたことに感謝します。

昭和58年は岐阜高校創立一〇〇周年にあたるだけではない、全国有数の歴史を誇る岐阜高校野球部の創立一〇〇周年にあたる年でありました。当時の野球部の実力は県内で

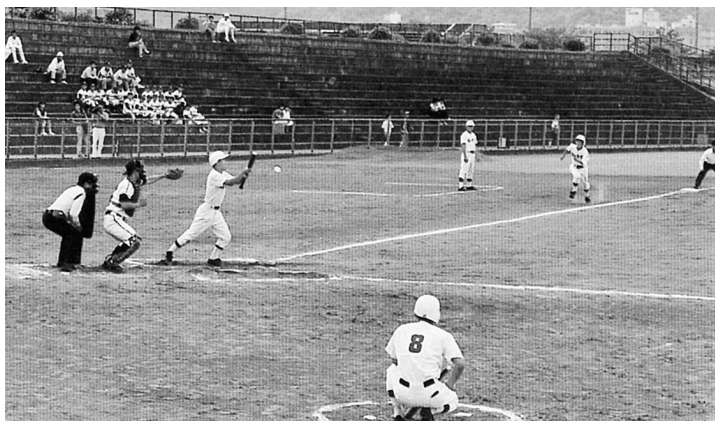


中央が私

も上位で、記念の年ということもあり、野球部員はもとより我々応援団員、在校生、卒業生さらには県民の多くが強く「甲子園」を意識しました。

夏の予選が始まり、雨天中止を含め二度にわたる多治見遠征での各務原東高校戦の後、県宮球場に舞台を移し、準々決勝大垣日大高戦、準決勝高山工戦と勝ち上がり、遂に甲子園出場を賭け決勝で岐阜第一高戦に臨むこととなり

ました。決戦日、スタンドは在校生、卒業生、父兄であふれかえりました。小嶋君、奥村君、松原君、中島君、木原君、三島君、高橋君、園部君、秋松君、泉君、丸茂君、私、総勢三十人の応援団員は文字通り鈴なりのスタンドを見上げ、武者震いしつつ、ある種の陶酔感に浸っておりました。結果は惜しくも甲子園出場は果たせなかったとは言え、スタンド一体となった、応援団歌、征下軍歌、そして校歌の大合唱、今も私の心に深く刻み込まれております。あれから二十三年が過ぎました。なんとなく恥ずかしくてここ数年卒業アルバムをひらいておりません。思いつめたように一途な目つきの高校生がいて、今の自分とは別人のようであります。



# 先生の思い出

荒川 賢一  
昭和49年卒

一年の担任は浅井先生、二年の担任は吉田先生、三年は杉原先生であった。

浅井先生と言えば妙に高度な数学を突然講義されて、ありやうと思っただけが、勝手にそのあたりは勉強していたから、まあ理解でき

たが、授業で初めて聞く人はどう思ったんだろうね、あれ。吉田先生とはとことん相性が悪かった。なにせ向こうも宗教教育を平気でやる先生だったし、こちらも授業無視して読書しているような生徒だったから、よく指導部に呼ばれて説教されたのを思い出す。とはいえ、それでおとなしくするようなタマでもなかった

ので、結局対立したままだった。おかげで生徒指導からは完全に目をつけられていたようだ。むしろ目をつけられて



れて吉田クラスになったのかもしれないが。

それで学校も懲りたのか

## 昭和48年度

### 岐阜高校

創立110年

### 国内外の主なニュース

NHK大河ドラマで「国盗り物語」放送（48年1月7日－12月23日）  
ベトナム戦争が終結、3月29日に米軍撤退完了  
祝日法改正。祝日と日曜日が重なった場合、翌月曜が休日

に（4月12日公布）

プロ野球リーグが2シーズン制で開幕（4月14日）  
PCBによる魚介汚染が明らかに（6月4日）

日航機がアムステルダム空港離陸直後、パレスチナゲリラにハイジャックされる（7月20日）

吉永小百合さん挙式（8月3日）

金大中事件（8月8日）

巨人がプロ野球史上初の9連覇達成（9月22日）

第4次中東戦争勃発（10月6日）。トイレットペーパー、洗剤の買いだめ騒動が続発

江崎玲於奈氏のノーベル物理学賞受賞が決まる（10月23日）  
熊本市の大洋デパート火災、213人が死傷（11月29日）  
小野田寛郎元陸軍少尉がルバング島から帰国（49年3月12日）

な？ 三年の杉原先生とは相性が良かった。そして散々お世話になった。もう鬼籍に入られたらしいが、まだお会いして話したいこともあったのに、と思う。それにしても、そんな私がよりによって教師稼業だから、世の中何が起るか分からない。そのうち教え子にこんなこと書かれるのだろうか。

乾燥に駆られていたばくは、いつも誰かと一緒にいたかった。それはぼくにもいらないものをもった誰かとだった。

そんな一方的な恋愛にも似た気持ちに伝えてくれる人材は、当時の下宿にはあふれていた。あまりにも個性的な先輩や友人たちが星のごとく存在した。

濃い紫煙に満ちた部屋の片隅に、先輩の描いたジョアナ・シムカスの鉛筆デッサンがあった。彼女の涼しげな眼差しにたちまち釘付けになった。映画と女性の趣味は彼に教わった。

## 本当に大切なことはみんな下宿で学んだ

小栗 雅裕  
昭和49年卒

入学式が終わり、両親が帰った後、下宿の三畳間にぼつんと取り残されたときほど心細かったことはない。ぼくの下宿生活の始まりだ。

だが、それはつかの間の静寂に過ぎなかった。まもなく、自分の部屋に戻るのとは眠るときだけ、いや、眠るのも

しばしば他人の部屋でという、めくるめくような日々が始まった。得体の知れない焦

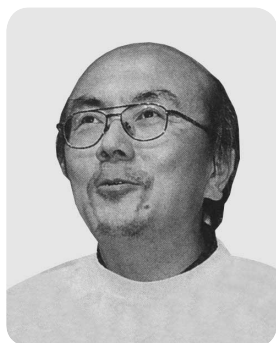
家出をして、ぼくの部屋に転がり込んできた友とは、来る日も来る日も、論争に明け暮れた。政治や哲学から漫画論に至るまで、彼の鋭い批評



(写真は、昭和47年の秋ごろ松尾下宿の前で富成先生、吉田先生と。撮影者は後列右から四人目。撮影者は写真部の加藤智洋君と思われる)

## ボクのルーツ

国枝 幸徳  
昭和49年卒



眼が、ぼくにとって一つの基準なるほど影響を受けた。彼はいまでもぼくのいちばんの親友だ。  
流星雨が降るといわれた夜のことも決して忘れられない。星の見やすい場所を求めて、先輩と岐阜の街中を自転車で朝まで彷徨った。期待した流星雨は見られなかったが、あの日味わったわくわくした気分は、今も色褪せていない。思えばわずか三年に満たない日々だったが、あれほど多くを学んだ、濃密で充実した時期をぼくは知らない。

今、ボクがこうして教育のあるべき姿にこだわりの現場主義を貫く教員でいられるのも、岐高時代の恩師のおかげだと思っています。  
生物部だったボクには、仙波さんという名物教師が立ちだかっっていました。ボクが二年生の時退職なさったのですが、その時に大げんかを

し、宣言通り意地でもらった三年の時の賞はボクの岐高時代最大の宝物です。

三年生の体育の時間、「お前、相変わらず身体硬いなあ〜」と、ぼそっとつぶやいて通り過ぎられた一年生の時の教科担任渥美先生にはびっくりさせられました。

それよりもボクが教育の道に進むことになったきっかけを作ってくださったのは二人の国語の先生でした。

了昌さんの熱く語りかける授業は、今もボクの授業観の根本になっています。授業者の思いが伝わらない授業なんというのの意味がない。共感を寄せてくれるか反発するかは生徒の自由だが、生徒の心に響く授業をしなければ意味がないという思いは、絶対に捨てられません。

岡本先生の「清光館哀史」の授業は、史学志向のボクが文化を学ぶようになるひとつのきっかけになっています。理路整然とすすめられる格調高い授業は、高校時代恐ろしくも楽しみな授業でした。

現在のボクは、岡本先生の足下にも及びませんが、了昌さんのスタイルを、抜けたるところまであわせて見習ってしまっているように思えてなりません。

岐高の恩師の思い出話をしだすとときがありません。翻って今の高校、教師が個性を磨いてありのままの自分を生徒にぶつけ、それを生徒に評価させるようなことは、忙しすぎてなかなか出来ません。

こんな環境で本当に優秀な生徒が育っていくのか、ボクは心配でならないのですが、皆さんはどうお考えですか？

## 苦い高校生活、 麗しき高校野球

澤田 勝典  
昭和49年卒

自分にとって岐阜高校時代の思い出は、野球しかありませんでした。実は、僕は学校が嫌で嫌でたまりませんでした。みんなが嫌いでした。そして、学校の先生も……。



みんな勉強一直線という感じでした。学校の先生も勉強するのが当然という指導をされてきました。野球の話をするものなら馬鹿にされるようなそんな雰囲気でした。自分は本当は、岐阜商業に行つて甲子園を目指したかったのですが、当時永井先生と後に慶応大学と全日本の監督になった二年上の後藤敏彦先輩が、わざわざ鶴沼中学校まで直接来ていただいて「一緒に野球をやらなにか」と誘ってくれました。その言葉が嬉しくて、それから勉強して岐阜高校に入ったものだから……。

そんな野球少年の夢は無残にも崩れ去りました。授業中の苦しみ、早く終わらないか……と。さらに先生の侮辱の言葉に、野球部でなかったら

殴り掛かっていたような事件もありました。そんな中、一年生の時に、加藤君と小川君、篠田君だけが唯一僕の話につき合ってくれました。彼らがいなかったら、そして、野球部でなかったら、たぶん退学して受験し直していたと思います。

卒業して、現在に至るまで、高校の思い出は野球だけでした。でも、同窓会の案内が届き、その幹事が野球部の辻君であったこと、その企画にあの加藤君が来ると聞き、思い切って三十五年ぶりに参

## 修学旅行のほろ苦い思い出

篠田淳子  
(旧姓・安本)

昭和49年卒

加しました。そして、みんなとお話する中で、自分の思いが誤解であったこと、知らない人まで僕が野球部であったことやそれを応援してくれていたことを聞き、自分が恥ずかしくなりました。

自分の青春時代の苦い思い出が少しずつ解けていくような気がします。そして、同窓会をきっかけに新しい友だちもでき、交友の輪も広がりました。青春時代を今からやり直したいと思っています。

修学旅行も終わりに近づいた小豆島での朝を迎え、私達三人娘は旅館前の砂浜で正座させられておりました。前夜、男子部屋で遊んでいたのが見つかり、お咎めを受けていたのです。トラップなどして楽しんでいて、あまり罪の意識もなく、見つかったも深

### 昭和48年度

#### 岐阜県内の出来事

「ひのえうま」生まれが小学校に入学。県内の新入学児も大幅減（4月）  
不法駐車をレッカー車で強制撤去（4月9日）  
乗鞍スカイライン完工、一般車の通行スタート（7月1日）  
岐阜市の西柳ヶ瀬で110軒

を焼く大火災（7月7日）  
高校学区制問題懇談会が6学区制を答申、49年度から実施へ（7月10日）  
長良川河口堰（ぜき）施工を大臣が認可（8月1日）  
県博物館起工式（8月9日）  
中央自動車道の瑞浪―多治見間が開通（9月6日）  
長良川鶴飼が史上最高の33万7千人の客を集めて閉幕（9月15日）

平湯トンネル起工（10月16日）  
物不足と物価高騰に対処するため、県が消費生活関連物資需給対策本部を設置（12月1日）  
岐阜市で休日診療所スタート（49年2月3日）  
岐阜市柳ヶ瀬でまたも火事（49年2月10日）  
恵那山トンネル貫通式（49年3月3日）



刻に思っていなかったもので、翌朝正座を命じられたのは、みんなの手前もあり恥ずかしくてたまりませんでした。こっぴどくしかられた記憶はありませんから、先生も見つけたからには「なにかお仕置きを……」という軽い気持でいらしたのではないでしょうか？ ですから、大いに反省していたというより、恥ずかしかった気持だけが今も記憶にあります。

最近になって同学年の掲示版やメーリングリストができて、その中でこのことを話題にしたところ、新たにわかった事実がいくつかありました。

ひとつには、このことをよく覚えている方と全く知らなかったという方がいらしたと、さらには、本当は自分達

も男子部屋にいたのに、布団に隠れて見つからずにすんだという女子もいたということ。ずるーい。先生、今からでもお仕置きしてやってください）

さらには、この三人娘の正座の光景を見て、「青春の思い出を作ろうとしているのに何が悪い！」と猛烈に抗議に行ってくれた男子がいたことです。（感動しました。もっと早く知っていたら……なんと男気のある方なんでしょう！）

今となっては 高校生活の印象的な思い出となりましたが、先生はあの時のことを覚えていらっしゃるのでしょうか。覚えていらしたら、どんなお気持だったのかお聞きしてみたいものです。

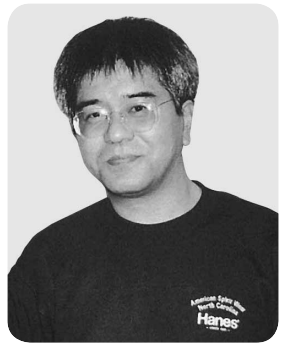
## ちょっとだけ青春

水野耕司

昭和49年卒

入学したばかりの頃、ぼく





は同じ机を共有していた華陽高校の女子と文通していた。机の中にノートを五角形に折った手紙が入っていたのがきっかけだった。

毎日のように手紙を交換した。朝、登校して机の中を見るのが楽しみだった。内容は将来のこと、仕事、勉強、家族や同級生、男女交際のことなど、今から考えると可笑しいくらいいまじめだった。いちばん印象的だったのは、彼女の同級生がバイクの事故で亡くなったというので、ぼくはバイクに乗るのが悪いのだと、まるで生徒指導の先生のような型どおりの反応をしたら、仕事に行くのに急いでいたのだからそういう言い方はよくないのだと、真剣に責められたことだ。勉強だけしていればそれで済んだばかり

とは別の世界があるのだということを、体で感じた瞬間だった。

文通は仮名でしていた。手紙のやり取りを重ねるにつれ、どんな人なんだろう、本名はなんていうんだろう、一度会ってみたい、などと妄想が膨らんでいった。でも別れは突然やってきた。席替えがあったのだ。今にして思えば、工夫すれば続けることは可能だったのに、なぜかこれで終わりなんだとあっさりあきらめてしまっていた。相手

の気持ちも考えずに。

三年間男子クラスで、その後女子とは無縁のまま卒業した。大人になって、ドラマ「白線流し」を見てこのことを思い出した。いや、決して忘れていたわけではないのだ。自分の不甲斐なさが情けなくて心の奥に封印していたのだ。何も告げずに止められて、おそらく彼女は遊ばれていたと思っただろう。今思うと本当に心が痛む。後悔してもしきれない苦しい思い出だ。



## 膝の思い出

古田肇  
昭和41年卒



岐高時代では、何と云っても、昭和40年の岐阜国体は、生涯忘れられません。

三年生の秋のこと、ある夜、突然多くの新聞記者の方々が自宅に訪ねてこられて、「岐阜国体の炬火最終ランナーに決定した感想は？」などと言って、写真を撮っていかれました。何のことかさっぱりわからず、戸惑うばかりでした。

翌日校長先生から正式にお聞きしましたが、国体出場選手でもない私には思いもよらなかったことで、不安でいっ

ぱいでした。私は柔道をやっていましたので、ガニ股にいたり肩。「とても無理です」と校長先生に申し上げたのですが。

それからというもの、毎日、専任のコーチに、付きっきりで、暗くなるまでご指導を受けました。特に、膝が割れるのをどう矯正するかが最大の課題でした。毎晩、膝を紐で縛って寝るようにと言われたのですが、どんなに強い紐を使っても、朝になると切れていました。よほど、膝が嫌がっていたのでしょう。

昨春秋、花フェスタ記念公園で「飛騨美濃合併130周年記念式典」が開催されました。たまたま、当時の国体の



炬火を手に練習

ビデオが流れておりましたが、どうしても、私の膝の動きに目が行ってしまいました。そして、「君に走法を教えることが、ぼくににとっての国体参加なんだ」と情熱を込めてコーチしていただいた田中猛先生、一緒に練習してくれた内海博さんをはじめ、当時お世話になった方々を思い出し、感謝の気持ちを新たにしました。

その後伺ったところでは、「出場選手のための国体」から、すそ野の広い「県民、国民あげての国体」を目指すことの象徴として、あえて出場選手以外から炬火最終ランナーを選んだとのことでした。長い国体の歴史の中で、このようなことは、他に例がないそうです。

当時、「これから、自分の心に炬火を灯し続けたい」などと、生意気な感想を述べていたようですが、まことに若気の至りというほかありません。

ご縁あって四十年ぶりに岐阜へ帰ってきました。平成24

年に再び岐阜国体が予定されており、今年7月には、その正式内定の運びとなります。思いがけない巡り合わせに、人生の不思議を感じております。

## 中一の決断

ストロウ はつ代

(旧姓・嶋)  
昭和40年卒



年のせいか最近、△あの時の行動をとっていなかったら▽とか、また逆に△あの行動をとっていたら▽などと振り返って思うことが多くなりました。そんな時いつも我ながらあきれるのは、行動の目的も意識せず、結末に何の期待も持たず、ただ状況に流されてとった行動がなんと多かった

か、ということである。ただ、そんな思い出の中に、ひとつだけ、まるで昨日のことのように生き生きとよみがえり、そして、はつきりと△あの行動をとってよかった▽と晴れがましい気持ちにさせてくれることがある。

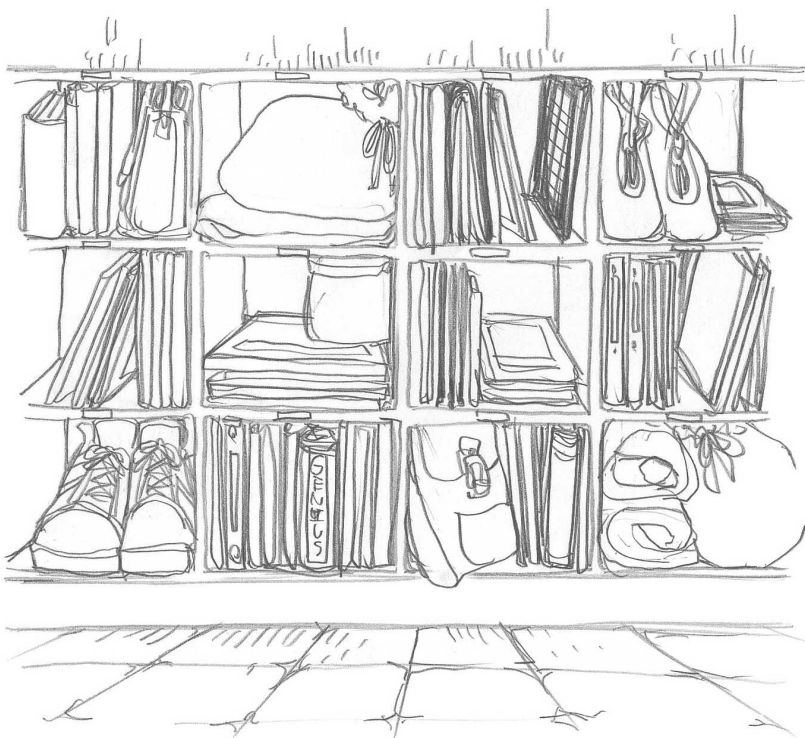
それは私が中一の夏のことである。私の故郷は岐阜県の古川町（現・飛騨市）で、最近NHKのドラマ「さくら」の舞台として名前が知られたが、私が中学生だった1950年代には、飛騨の深い山ひだの間に隠れてしまった誰にも知られない小さな町だった。日本中同時に、同じ情報を共有するようになった現代の人には想像もつかないことかもしれないが、その頃の飛騨の山奥の小さな町がどれほど中央の社会から隔離されていたことか。テレビさえ無い時代のことである。

そんな町にアメリカ・カリフォルニアから突然、あるファミリーが引っ越してこられた。古川の由緒ある大きなお寺のひとつ、本光寺の住職の

息子さんがアメリカで長年仏教の伝教活動をしてこられ、カリフォルニアでアメリカ生まれアメリカ育ちの日系の女性と家庭を持たれたのだが、本光寺の住職であるお父様が高齢になられたため、その後を継ぐべく一家で古川に帰ってこられたのだ。日本語が片

言しか話せない夫人と、小学校低学年の二人のお子さんの家族だった。

その頃は、中学に入学して始まった英語の授業に並々ならぬ関心を抱いていた。学校の授業だけではもの足らず、ラジオの英語講座を聞いて自分で勉強したりしてい



た。テープレコーダーなど一般家庭にはない時代で、ラジオ講座は一回聞いたらそれっきりである。もちろん生きたネイティブスピーカーの英語を聞くチャンスなど皆無である。そんなところにこのファミリーが引っ越してこられた。

私には何の迷いもなかった。本光寺のこの新しい奥さまに英語を教えてもらおうと決心した。両親に相談もせず、ある日、たった独りで大きなお寺の境内のずっと奥ま

ったところにある庫裏の戸をあけて「ごめんください」と直訴に出た。

ご家族の一人の年取った女性が出てこられた。アメリカから来られた奥さまにお願いがあるのだと告げると、取り次いで下さって、奥さまが出てこられた。今でもその光景が眼に浮かぶほどはつきり憶えているのだが、奥さまは中学生が独り、突然自分を訪ねてきたことにいぶかしげな顔もされず、「英語を教えていただけませんか」という単刀

直入この上もない私のお願いに、これまた淡々と「いいですよ」と日本語で言われた。

こうして私はネイティブスピーカーの先生に一对一で英語を習うチャンスをつかんだ。その頃は何もわからなかったが、今思うと奥さまは訛りのない非常に標準的な英語をはっきりと発音される方だった。ネイティブスピーカーだからといって、誰でも母国語を教えることができるのではないことも後年認識させられることになるのだが、奥さ

### 昭和48年度

#### ことば

「省エネ」  
「うちのカミさんがね」  
「これにて一件落着」  
「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く」  
「三分間待つのだぞ」  
「ーと、日記には書いておく」  
「ちょっとだけよ」

#### うた

「狙いうち」 || 山本リンダ  
「他人の関係」 || 金井克子  
「ジョニイへの伝言」 || ペドロ & カプリシヤス  
「五番街のマリーへ」 || 同  
「心の旅」 || チューリップ  
「危険なふたり」 || 沢田研二  
「草原の輝き」アグネスチャン  
「わたしの彼は左きき」 || 麻丘めぐみ  
「てんとう虫のサンバ」 || チ

#### エリッシュ

「くちなしの花」 || 渡哲也  
「恋文」 || 由紀さおり  
「神田川」 || 南こうせつとかぐや姫  
「心もよう」 || 井上陽水  
「夢の中へ」 || 同  
「なみだの操」 || 殿さまキングス  
「あなた」 || 小坂明子  
「夜空」 || 五木ひろし  
「母に捧げるバラード」 || 海援隊

まがちゃんとした教育のある方だったということも幸いだった。

その後私は、中二になると岐阜市の伊奈波中学に転校したので、本光寺の奥さまから英語を教えていただいたのは六カ月間ほどだったのだが、あの時、正しく美しい英語の発音が耳に植えつけられたことが、その後の私の英語学習歴にどれ程深いインパクトがあったことか、計り知れないものがある。テープレコーダーもビデオも無い時代に、飛騨の山奥であのような先生に英語を一对一で教えていただけたことがどんなに幸運だったか。しかも中一という早い時期に。私は今でもあれは神様のお取り計らいだったと思っ

相談し、両親は全く「事後承諾」をさせられただけであつた。

その後、本光寺の奥さまは英語を教えることを仕事にはされなかったし、あのよう

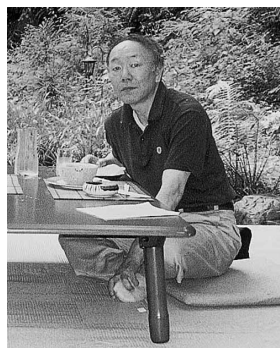
に奥さまに願ひ出で英語を教えていただいたのは私だけだったようである。振り返ってみると、一貫性のない行動が多かった私の半生(諦めるのは死ぬ三十分前でよい、と最近ある人に言われたのでまだ諦めていないが)で、あの行動だけは、はつきりとした目的意識のある行動だった。

そしてその結果は、私の人生にははつきりとした軌跡を残している。岐阜高校の三年生の時には、AFSの交換留学生としてアメリカの高校生活を一年経験することができた。その後アメリカに渡り、アメリカ政府の職員として日本政府との折衝がキャリアになった。

あの中一の夏の私の行動の波紋は、私の人生に今も脈々と生き続けている。

# 玉のような汗

篠田 武司  
昭和39年卒



夏休みの午後、敷地の北端、堤防下のテニスコートを臨む道場は、もう三〇度を超えていた。普通、生徒は三年生のこの時期から本格的に受験勉強に入る。それなのに剣道部は部員が少なく、三年生といえども秋の試合要員として、私は松井(鬼頭)君や片桐君と夏季の練習に参加していた。袴と胴着を着け、その上に防具を着けていく。もうこの準備の段階で汗が身体から湧き出してくる。特に面を被るとたちまちのうちに汗が噴き出してくる。長年染み込んだ

汗臭さがプンと鼻腔に漂う。それとともに、緊張感が沸いてくる。戦闘開始だ。

面打ち、乱取り、模擬試合とひとしきり稽古が進む。途中休みつつ約二時間。これで今日の苦しい稽古は終わりで。ハァー、ハァーと言いな

がら面を取る。一段と汗の臭いが襲いかかる。何ともいえないムツとした変な臭いだ。そして、噴出してくる不愉快な汗をタオルでぬぐう。する

と、すぐ汗がじんわりといった具合ではなく、ぶつぶつと丸い汗として噴き出してくる。そう、「玉のような汗」だ。いま、大学の教員をしている。

素晴らしい論考を読んだり、何かこれだと思うことを発見したり書いたとき、いまだに知的な興奮が背筋を走り抜ける。思わずブルと身震いする。心底、生きていて良かったと思う。そうしたとき、ふと夏の稽古場の汗の臭いと、「玉のような汗」を思い出す。そのときの情景がいまだにくっきりと甦るのだ。

なぜかよく分らない。で

も、多分あのときの「玉のような汗」は肉体が興奮し、生きる喜びを伝えようとしていたのだと今は思うことができる。知的な興奮も肉体の興奮もどこか相通じているのだ。高校時代の思い出は多くある。友人たちとの思い出は限りが無い。しかし、最も鮮烈な思い出といえば、夏のあの「玉のような汗」だ。

## 岐高時代の記憶

高安 孝至  
昭和39年卒



昭和20・21年生まれの私達は、その後の「団塊の世代」と異なり最も競争の少ない学年だった。県下随一の進学校・岐阜高校への入試倍率も

当時は限りなく一倍に近かったと記憶している。それでも私は岐阜高校に入るためそれなりの勉強をした。私が是非でも岐阜高校への進学を希望したのは、中学まで丸刈りの経験がなく「県内の高



校で唯一、男子に長髪が許されていた高校」という不純な理由も大きかった。入学後の私の高校生活は大学受験のための勉強が中心で、今思い出してみても、厳しい先生方に多くの教えを受けた覚えはあっても、高校生活が楽しかったという思い出は少ない。

そんな私の高校時代でも記憶に残っていることもある。まず、社会的なことを何も知らずに入学したばかりの私に、六十年安保闘争について熱く語る同級生の話が新鮮に耳に響き、自らの幼さを痛感させられたことである。当時の日本は次の七十年にかけて学生運動の全盛期であった。また、二年生の春には野球部が選抜で甲子園に出場、皆と

甲子園まで応援に行ったことは貴重な経験で、卒業後岐阜を離れてからも、お国自慢が話題に上る度に私にとって自慢のできる一つとなった。

次の記憶はビートルズ。当時イギリスから彗星のように登場したビートルズの新鮮な音楽は、ながら族の受験生にとって欠く事の出来ないものだった。くしくもそのビートルズが来日時(1966年)に泊まった東急キャピトルホテル(昨年まで岐阜高校の在京同窓会会場)が去年閉館したとのニュースで当時の記憶がよみがえり、今再びビートルズをPodで聞いている。

そのビートルズを聞きながら受験勉強をしていた高校三年の11月22日深夜、ラジオから飛び込んできた米大統領J・F・ケネディがダラスで暗殺されたとのニュースに強烈な衝撃を受け、一晩中眠れなかったことも忘れられない。そんな私も六十歳の節目を超え、最近では岐阜、東京と同級生たちと会う機会が増え

てきた。その度に、岐阜に生まれ岐阜高校に在籍していたことを誇りに思う気持ちが強くなってきた。大事にしたい故郷と仲間である。

## 楽しむ

福村 眞雄  
昭和39年卒



本年度、齢六十二を数えることとなった。高校生時代を省みるに、記憶も薄く、あまり良き思い出もない。柔道の練習に励んだが、三年生になってもレギュラーにはなれず、忸怩たる思いが残っている。

思い出すのは、レギュラーになれず多少僻んでいた三年生の秋口の事である。英語の

授業の冒頭、「豆チャン（殿岡先生）が、「オイ、福村、お前はドコを受験するんだ」と。「まだ決めてません」「そんなはずないだろう」「言いたくありません」てなやりとりが三十分以上続いた。私は北海道大学を密かに望んでいたが、柔道が弱いばかりか、成績もパッとせず自信がな

く、応える気分になれなかった。が、豆チャンの執拗な追求に根負けし、「北大です」と心えた。すると、突然豆チャンは「北大には『都ぞ弥生』という寮歌がある」と、

「都ぞ弥生の雲紫に……人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

と朗詠した。これでその日の英語授業は終わりであった。今なら、父兄や受験生本人からクレームが付くような授業（？）であった。

こんな出来事が励みになったのか、私は北大に合格した。尤も、英語はからっきしで、全く得点はかせげなかった。兎にも角にも「都ぞ弥生」に後押しされ、入学した

### 昭和38年度

#### 国内外の主なニュース

「昭和の岩窟王」吉田石松氏が名古屋高裁で無罪判決（38年2月28日）。逮捕後50年。同年12月死去  
吉展ちゃん誘拐事件（38年3月31日）  
狭山市で女子高生が誘拐される。3日後に遺体発見（5月1日）  
関西電力の黒部第四ダム完成（6月5日）  
「小さな親切運動」スタート  
（6月14日）  
名神高速道路が部分開通（7月16日）。40年7月1日、小牧―西宮の全線開通  
第1回全国戦没者追悼式（8月15日）  
心身障害児の救援運動「あゆみの箱」スタート（8月）  
草加次郎事件。東京の地下鉄京橋駅で署名付き手製爆弾が爆発、10人重軽傷（9月5日）  
松川事件の上告審で17被告全員に無罪判決（9月12日）  
ボクシングの海老原博幸が世界フライ級チャンピオンに（9月18日）  
伊藤博文肖像の新千円札発行（11月1日）  
大牟田市の三井三池炭鉱で爆発事故、死者458人（11月9日）  
横浜市鶴見区の国鉄東海道本線で二重衝突事故、死者16人（11月9日）  
第30回衆議院議員総選挙（11月21日）  
ケネディ大統領暗殺。初のテレビ中継で速報（11月23日）  
力道山が暴力団員に刺される（12月8日）、一週間後に死亡  
ライシャワー駐日大使が少年に刺される（3月24日）

というより「バンカラ」恵迪寮」に入寮し、青春を謳歌した。今振り返るに、豆チャンの言動は、昨今の教育問題に何がしかの光を射ている気がする。

今私は、豆チャンの朗詠が耳の底に残っているせい、か、長唄の稽古に一所懸命（？）である。勝負という形で優劣が決する柔道と違い、遅々として上達しなくとも、僻みも

## 人生糾える 縄のごとし

堀谷 喜公  
（旧姓・安藤）  
昭和39年卒

せず、飽きもせず、諦めもせず、である。

今は廃校となった羽栗中学校から岩田照雄君と二人が昭和36年4月に岐阜高校へ進学

した。さすが進学校で、皆がよく勉強していたのには驚いた。受験を控えた前年の暮れに急性腎炎となり、岐阜大学の第二内科に入院し、高校での運動は控えるようにと主治医から言われていた。入学直後、硬式野球部は練習もきついで、もう出来ないと思わらめていた。しかし、何とか体も鍛えたいと思っていた。しかられるかもしれないが、

軟式野球は遊び程度なのでやってみることにした。

硬式野球部は秋の東海大会で二位の好成績を収め、甲子園出場が期待された。部員が十三名で練習に人が足りないとの事で、今は亡き溝口先生がある夜笠松の我が家にお出でになり、硬式野球部に入るよう私と父親を説得した。腎臓の機能が心配なので、その点をお断りし、入部することとした。並河君（名大農学部獣医学科教授）と二人が入部し十五名となった。



第三十四回全国高校野球選

抜大会に東海地区から岐阜商業高校、中京商業高校とともに出場できた。二回戦で和歌山桐蔭高校と対戦し、九回表一対三で敗戦濃厚だったが、一死一、二塁からトップバッターの青木さんが起死回生の同点三塁打を左中間に放ち、延長十回の表に四番の安東さんが二ランホームランをレフトに放って勝った。ホームベースで岐阜校歌を歌った感激は忘れられない。

キャッチャーでレギュラーの三年夏には県大会直前に武儀高校との練習試合で右薬指を骨折し、野球で人生を送ることは運が伴わないとやっていけないことを知った。担任の吉田先生や溝口先生に相談させていただき岐阜大学医学部に進学した。祖父が甲子園出場直前に直腸癌で亡くなったので、医師になるのなら外科医と決めていた。医学部合格の日に、溝口先生が我が家に来られ、近鉄バッファローズから誘いがあったと言われたときは、うれしかった。キ

ャッチャーとしてスローインが期待されたようだ。百塁走も十二秒になり、キャッチャーとしては早い方だったかと思う。

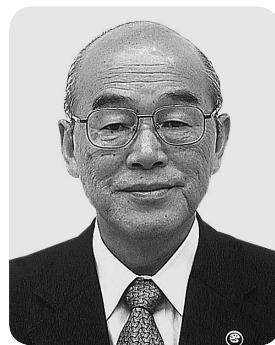
野球で覚えたことはピンチの後はチャンス有り、チャンスの後にはピンチ有り、ピンチには耐え、チャンスに驕らずである。

長年夢にしてきた郡上市市民病院新築工事が完成し、平成18年5月8日に開院できた。二次医療、二次救急が行える地域中核病院を目指している。院長として、計画から八年の長きにわたり関係各位のご指導を受けたことを感謝している。忍耐のいる仕事でもあったが、岐阜野球部で学び取ったことが活かされたと思う。

今の心境は良寛の「散る桜残る桜も 散る桜」である。もうしばらく現場で医療を行わなくてはならない。国重要無形文化財の郡上踊に来てください。一緒に踊りましょう。

## 忘れ得ぬ三年

松 永 清 彦  
昭和39年卒



岐阜市鷺山二番地。私が高校三年間生活をした場所です。齋藤道三の居城として名高

い鷺山から二キロほど東にあった小林教授のお宅にお世話になりました。小林教授は岐阜大学の農業土木の教授をしておられ、真の教育者として多くの学生の信望を集めておられました。近頃もお手紙を頂き九十歳を迎えられた今なお健在で、日本各地を旅行しておられる由大変うれしく拝読させていただきました。何時もにこやかにお話をして頂き、田舎から出てきた子供に不安を感じさせないよう接して頂きましたことに大変感謝をいたしております。また子供のころからアレルギー体質であり、えり好みをする子供

### 昭和38年度

岐阜県内のできごと

各務原市が誕生。稲葉郡那加、蘇原、稲葉、鶴沼の4町が合併（38年4月1日）  
岐阜公園で日中両国の永遠の友好を誓う記念碑の除幕式（4月2日）

40年岐阜国体が正式決定（4月6日）

長雨で農業など大被害（4月末～6月）

県庁舎移転が県議会で可決（12月19日）

岐阜県史の1巻目、「通史編近代上」を刊行（3月1日）

可児郡御嵩町の炭鉱で落盤事故、3人死亡（3月21日）

でした。奥様の晶子夫人にさまざまな料理法を試みていただき、二年生のころには青みの魚も食べられるようになり、人並みの体力を得ることができました。還暦を過ぎた現在、元気に勤められる体を作っていたいただきましたのも晶子夫人のお陰であります。食育がいかに大切か身をもって体験をいたしております。

小林家での生活は、束縛さ

れることなく好きな本を読み漁ることができました。小林先生には二人のご息がおられ、兄弟のように過ごすことができましたのも楽しい思い出であります。

学校生活では、一年が高井先生、二年が後藤先生、三年が吉田先生の担任で指導を受けました。大変失礼にあたるかもしれませんが「アンパン」「ヨシズ」の呼称の方が

### 昭和38年度

#### ことば

- 「バカンス」
- 「三ちゃん農業」
- 「小さな親切」
- 「カギっ子」
- 「カッコいい」
- 「シェー」
- 「へんな外人」
- 「お呼びでない」
- 「OL」
- 「ハッスル」
- 「ON砲」
- 「ガチョーン」

#### うた

- 「インド人もびっくり」
- 「おえりやーせんの一」
- 「丈夫で長持ち」
- 「長崎の女」 〓 春日八郎
- 「東京五輪音頭」 〓 三波春夫
- 「見上げてごらん夜の星を」 〓 坂本九
- 「高校三年生」 〓 舟木一夫
- 「学園広場」 〓 同
- 「こんにちは赤ちゃん」 梓みちよ
- 「美しい十代」 〓 三田明
- 「浪曲子守歌」 〓 一節太郎

親しみを感じられる方が多いのではないかと思います。引っ込み思案の私にとって、高校生活はすべてが楽しいものではありませんでしたが、社会人になって共通の思い出の中で語り合える友を得たのも岐阜高校での生活があったからこそだと思います。私が民間会社に勤めていた東京での三十年間、平成10年に岐阜に帰りましてからも多くの同級生、同窓生に精神的に支援を賜りました。心から感謝を申し上げます。

## 追悼

### 豆ちゃん

水出 俊子

(旧姓・一柳)  
昭和39年卒

私たちは昭和30年代の最後の三年間を岐阜高校で過ごした。羽島の田舎から出てきた私には岐阜はまぶしいほどの都会だったし、英語教師「マメ(豆)」(殿岡辰雄)先生の存

在はもっと鮮烈だった。

授業中の私語は厳禁。教壇にたどり着くや先生は無言で小さな紙を配る。生徒は前回の授業で習った英文を暗記してきて必死に書き写し、書き終えた者から順に手を挙げていく。かなりしんどい授業であった。

その豆ちゃんが、ある男子生徒と私の仲がアヤシイと匂わせる発言を授業中にした。身に覚えがない上、授業中に言われたことが許せなかった私は、アネゴ肌のクラスメート数人に援護され、直ちに職員室に向かった。階段の上で待ち構えていた私たちに豆ちゃんは一瞬ギョッとしたが、ひるむことなく私は涙ながらに抗議した。女生徒たちに詰め寄られ、睨みつけられた豆



ちゃんが謝ったかどうかは忘れたが、今思えば若気の至りだった。

大学進学後、先生の詩集『重い虹』の出版記念会に来るよう召集がかかった。場所は日比谷公園内の松本楼。そこで先生の教え子の篠田一士、小島信夫氏などそうそうたる面々と出会えたのも懐かしい思い出である。

ある日、岐阜の先生のご自宅に遊びに行くと「俊ちゃん、ワシ、ガンやで」と豆ちゃんが手を口に添えていた。「本らっぽくささやいた。「本当？」……私は半信半疑だった。それから間もなく、先生の訃報が届いた。そういえばあの時、別れぎわの先生の後姿が寂しかった。

今、先生がご存命だったら

もっともっと、いろいろお話しできたのに。先生、今地獄でなくて天国にいるんですよね？

## 演劇部のころ

山田 米彦

昭和39年卒



岐阜高校の最初の担任は、小林先生だった。先生の、教科書などそっちのけの破天荒な授業に驚嘆し、劇団「はぐるま」の主宰者として脚本・演出に活躍されていることに感動し、部活を選ぶに際しては、単純に先生への憧れだけで演劇部を選んだような気がする。

だから、芝居が好きだから、役を得て舞台上に立ちたい

とか、そういう気持ちもなくて、裏方で誰かの手伝いをすることが多かった。それでも、いざ本番となって幕が上がる直前の緊張と高揚は四十年余を経た今でも思い出すことができる。先生の縁で「はぐるま」のお手伝いをし、劇団の皆さんの薫陶を得たこととともに、得難い経験を積むことができた。その後社会へ出て、演劇とはすっかり離れてしまい、部活の仲間と会うこともほとんどないのだけれど、今にして思えば、あの日々が自分の青春の一部だったのだろう。

三年生になって、諸般の事情で大学進学を諦め、授業中に文学作品を読む日々を過ごしていた。そんな折、小林先生の後任で顧問になられた岡本先生の発案で、オリジナルの芝居を上演してみようということになり、脚本の執筆を任された。悪戦苦闘のうえ書き上げ、小林先生のお宅へ通って指導を受け、何度も補筆訂正を繰り返して、どうにかコンクール前に完成させるこ

とができた。

その脚本を後輩たちが取り上げ、舞台にかけてくれた。文化祭とコンクールの地区予選、県大会の計三回の公演だったと記憶しているが、自分

が書いた芝居を見守ったあの特別な感慨は忘れられない。弱い脚本を精一杯の努力で舞台化してくれた後輩たちには、心からありがとうと言いたい。

この脚本には後日談があり、数年後、どこかの高校が上演してくれたと聞いて、秘かな喜びをかみしめたことも、今となっては懐かしい思い出である。

